

10×10×10の可能性

思想 文化 時代 社会 人物 土地 環境 地域 過去 未来 道徳 価値観 etcetc..

建築には世界観が詰まっている。

建築自身は、建築そのものは、「表現する箱」なんだと思う。

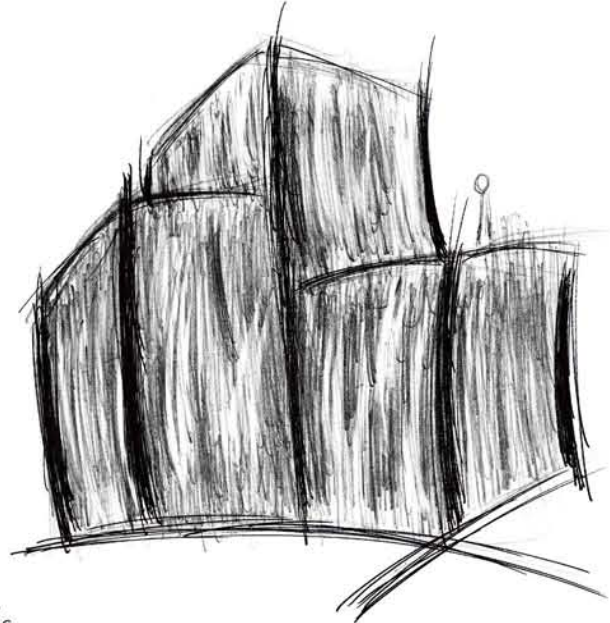
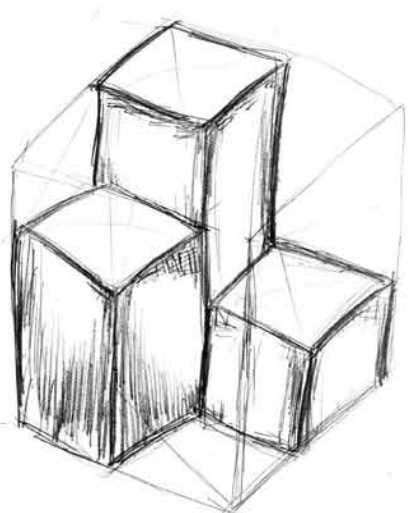
建築は多様な世界観を表現し続ける存在。

モニュメント 装置 作品 世界(空間,ワールド) 物語(小説)

そんな何か。

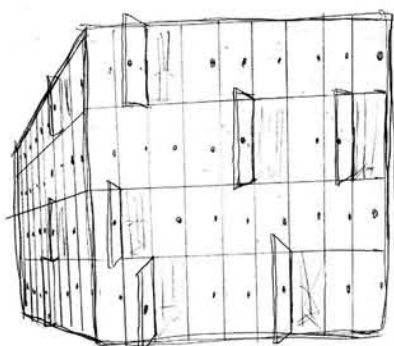
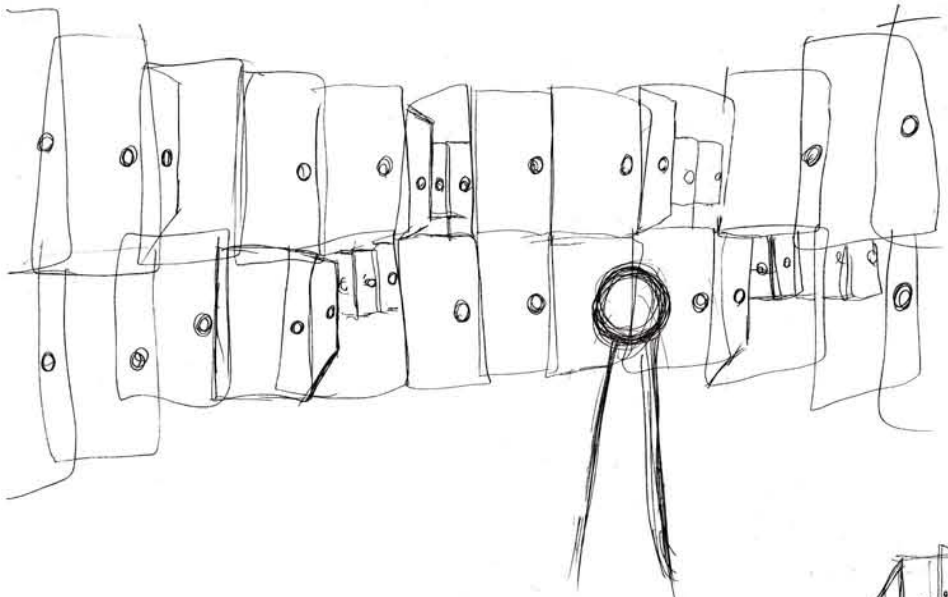
料理 食べるという行為、それは人間の最も根源的な行為であると思う。

動物としての姿を隠し、
別な高次な存在として振る舞おうとする人間の中に潜む、生命の力強さ。
生物のエネルギーを感じさせる行為。
大地を歩む、山肌を登る、海を漕ぐ。
それらに似た、強さ。
文明を生きる私たちが忘れかけている、自然の中を生きる強さ。
料理が私たちにそれを教えてくれる、気付かせてくれる。



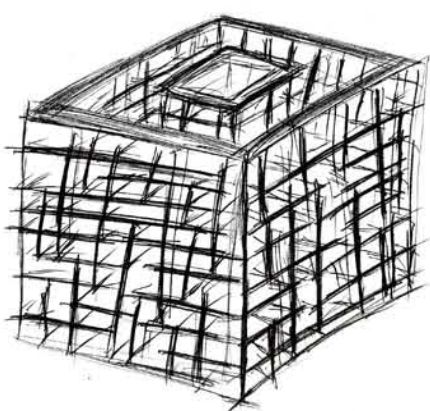
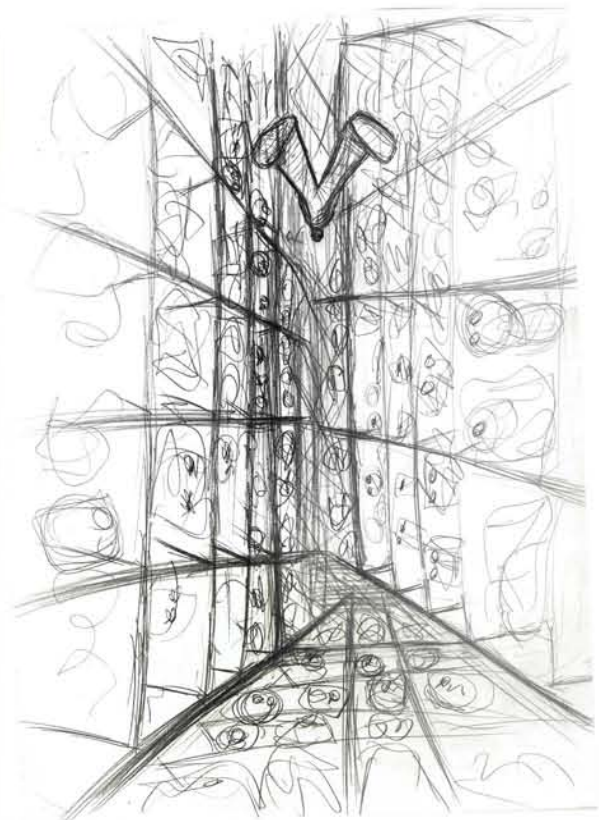
楽器 歌を奏でる、口ずさむ。
それはどこか不思議な行為だと思う。

生命活動に、それはなくても問題ないけれど、誰しもが当然のごとく行う。
はるか昔から、どの国の、どの人間も。誰しも聞き、奏で、口ずさむ。
奇妙で、不思議で、どこか滑稽だ。人間自身に備わっている不思議なリズム感。
そんな気がする。



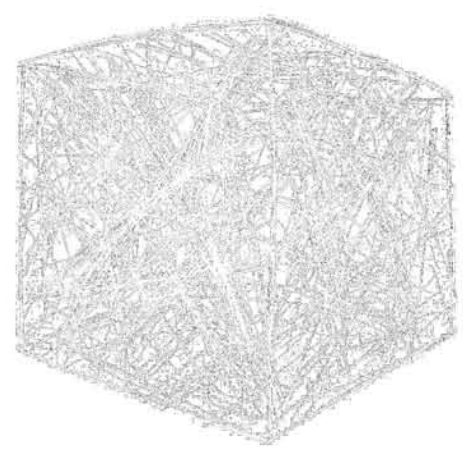
流行のモノ

ヒトの周りにはいつもモノが流れている。
だが我々は、ほとんどのモノを意識しない。
無意識に使い続ける。モノは次々と消費されていく。
私たちの関係は一方的。
ただ1つ、最初にそのモノと出会うとき、
その時だけは私たちの関係は異なる。
ヒトの周りにモノが漫然と溢れている状況とは違う。
ヒトがモノの世界に入り込み、そして探す。
互いを見つめ合うように。



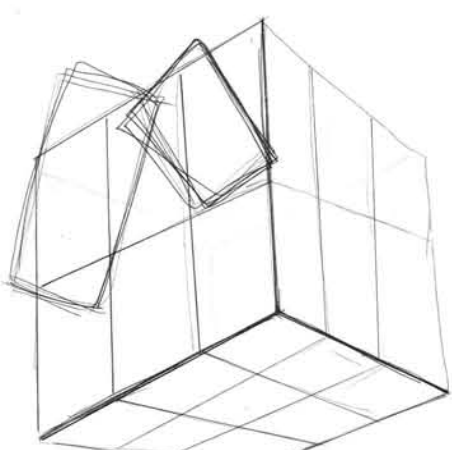
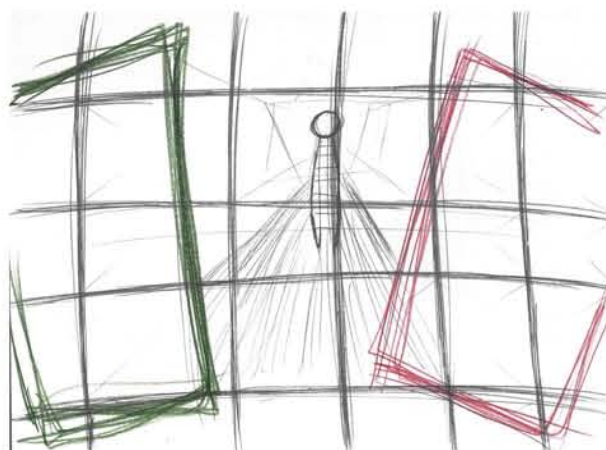
jewelry 我々の世界とは
別の世界からきたような存在。

異物 異端 悠久な存在 そういう美しさ。
異空間で生まれ永遠の時間を経て形成されたような。
その神秘さ 不可侵さ 怪しさ そういう魅力。
超自然的な存在。我々はその姿に魅惑させられる。
いつの時代も感嘆される。



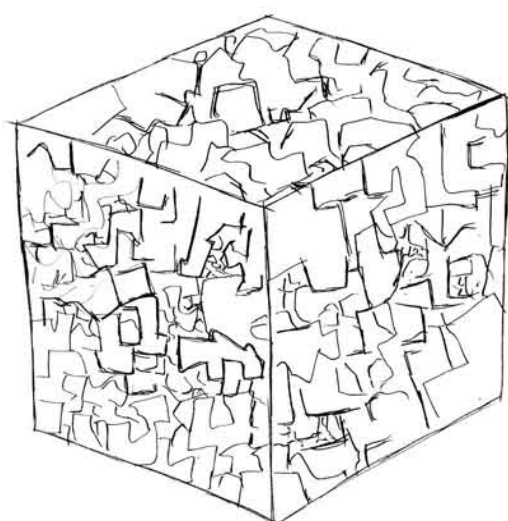
服 私たちは服を着ている。それはなぜか。
私たちは服を着なければならぬ。

人間特有のルール。着なければならぬ。
社会が服を通して私たちを規定する。
服を身にまとい、服が私たちを束縛する。
一方で、服は私たちが社会に向ける顔である。
自分で作り上げる顔、自己表現の手段である。
ただ姿をさらすのではない。服によって、自分を社会へ解放する。
服には束縛と解放がある。



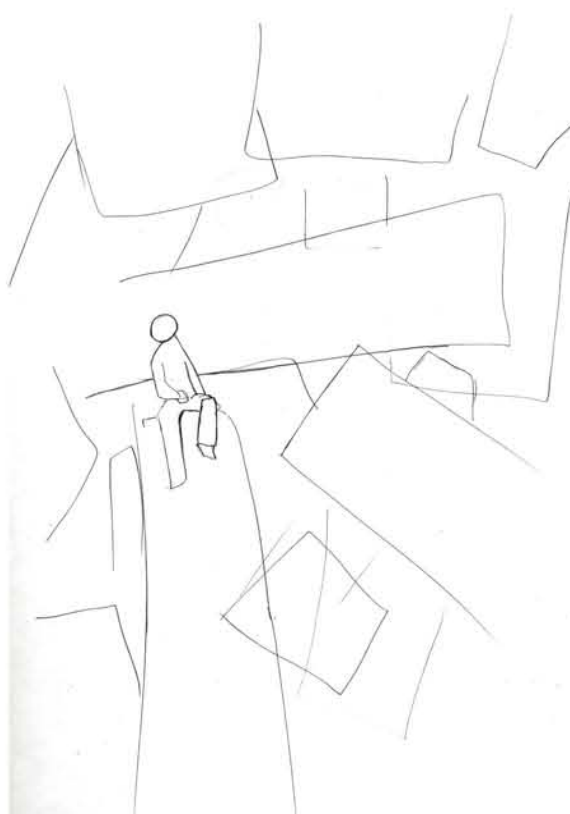
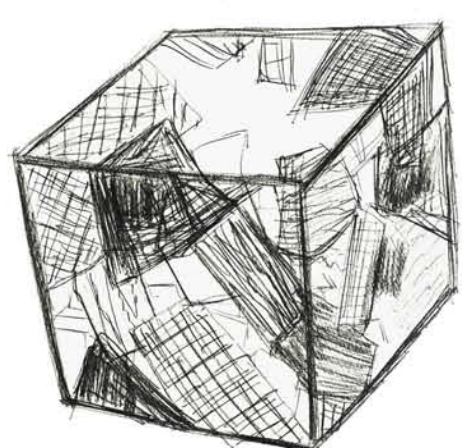
キーホルダー 1つ1つはバラバラの小さな存在。
それは1人の人間の下に集う。

人の好みのもと集められるのではない。
小さな存在が私たちの中に好みを見いだすのだ。
私たちは小さな存在に自分の好みを開拓される。
彼らが私たちの世界に生まれ、育ち、私たちの世界は広がる。
小さな存在が、私たちの世界の中で、
ばらばらにボコボコと生まれ、互いを隔てることなく共存し育っているのだ。

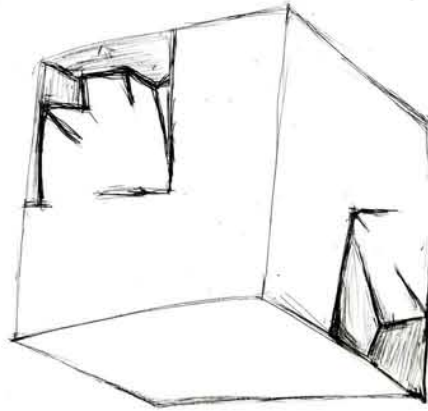


自転車 自転車やクツ、それは私たちにとって、
動く、というイメージの象徴だ。

自らの足で動く。それを連想させる。
動いているときの世界は躍動感に満ちている。
自分の周りのすべてが変化している、動いている。



古書

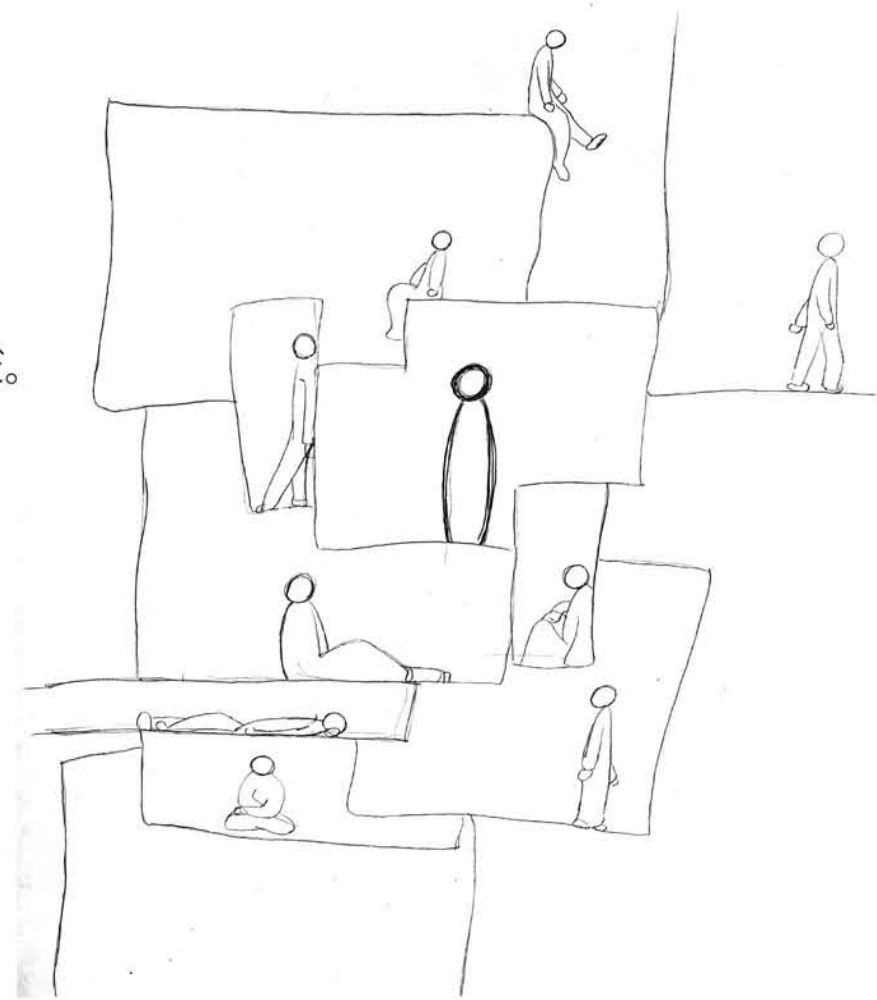
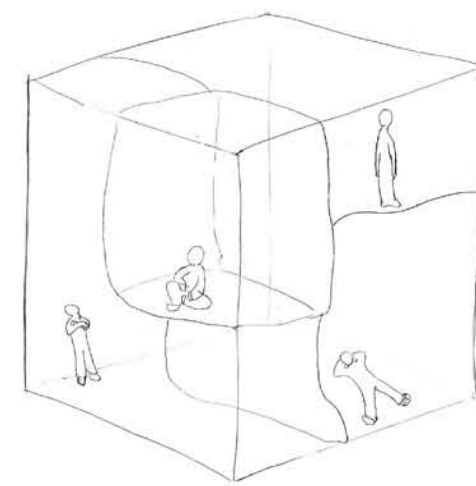


本に描かれた物語。
人から人へ、古書自身の歩んだいくつもの物語。
そしてこれからさらに歩んでいく物語。
古びた紙、擦れた文字、汚れ、折れ目
古書からはたくさんの物語を感じる。
古書の一冊に、物語が縦横無尽に広がっている。



美術品

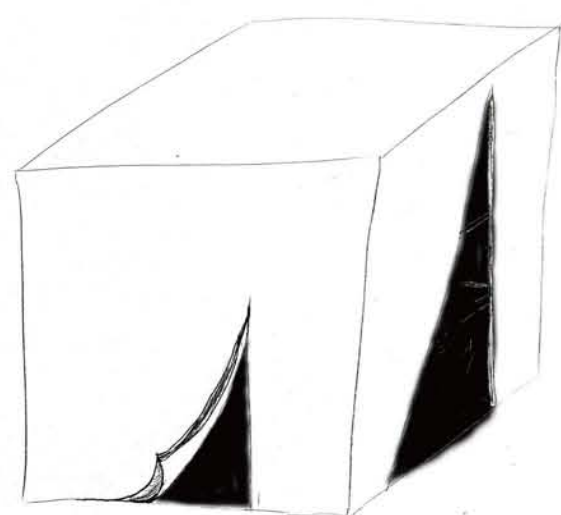
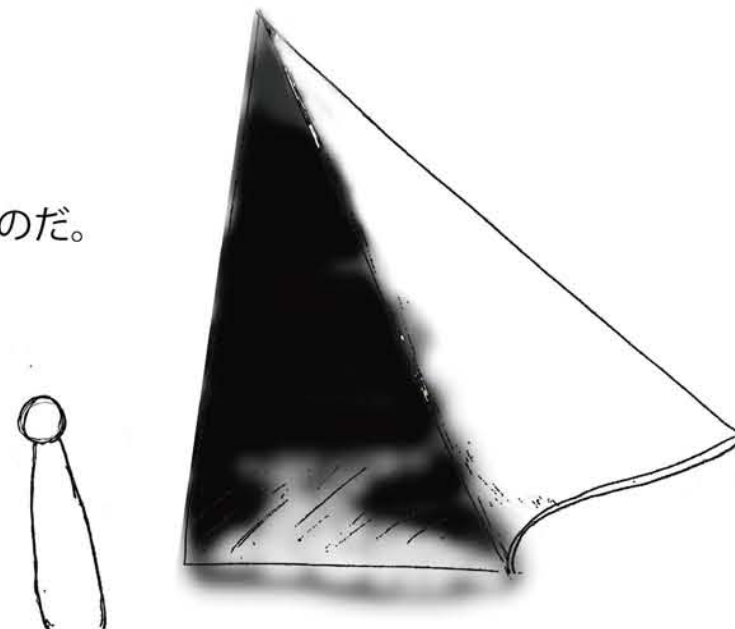
人はみんなこの1つの世界に生きているが、
我々の感性、感じる「世界」はまるで違っている。
私たちは、1つの世界に生まれながら、
私は、まったく別の「世界」に生きているようだ。
同時進行していくパラレルワールド。
芸術家、彼らは世界から、「世界」を見いだす人達だ。
そして私たちに表現する。
それは私の世界とは違う「世界」への入り口。



私たちは世界観を感じとりモノの姿を感知している。
単にモノを、そのまま物体として見ることは無い。
その背景 暗示 連想 記憶 それを見る。

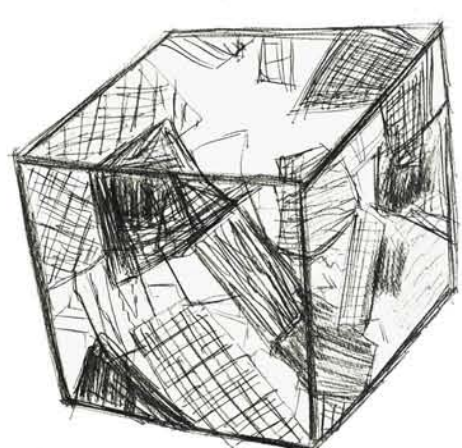
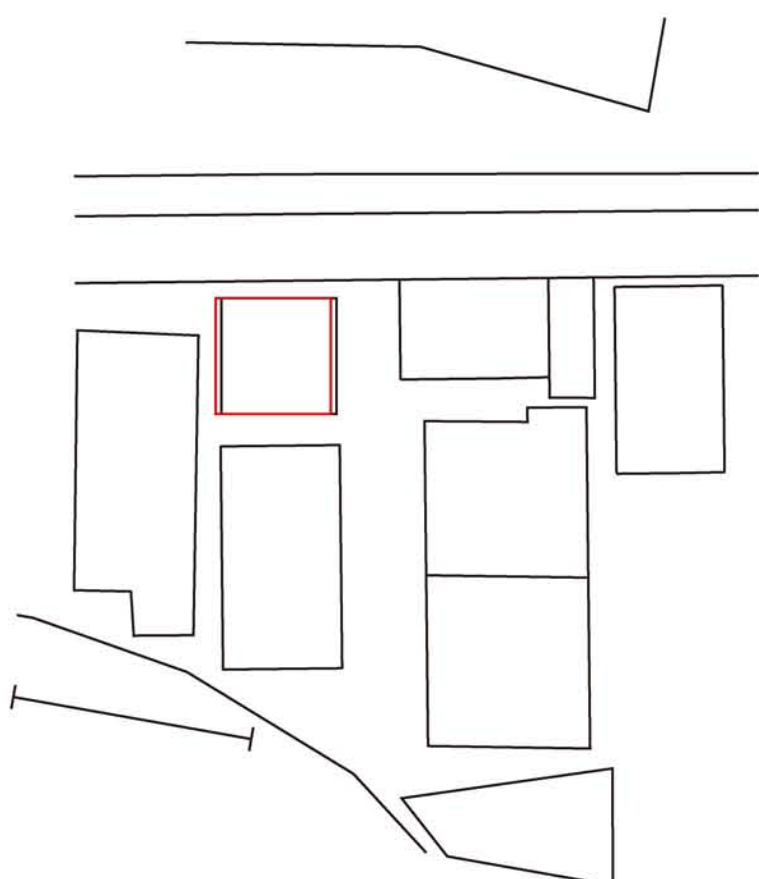
スイーツ

一口。味がすぐさま口に広がる。
私たちを味覚の世界へと引き込む。
現実ではないような、1つの感覚の世界。魅惑的な世界。
1つのスイーツに味覚が詰まっている。
私たちに快楽を与える味の詰まった塊。
それは私たちを虜にしている。



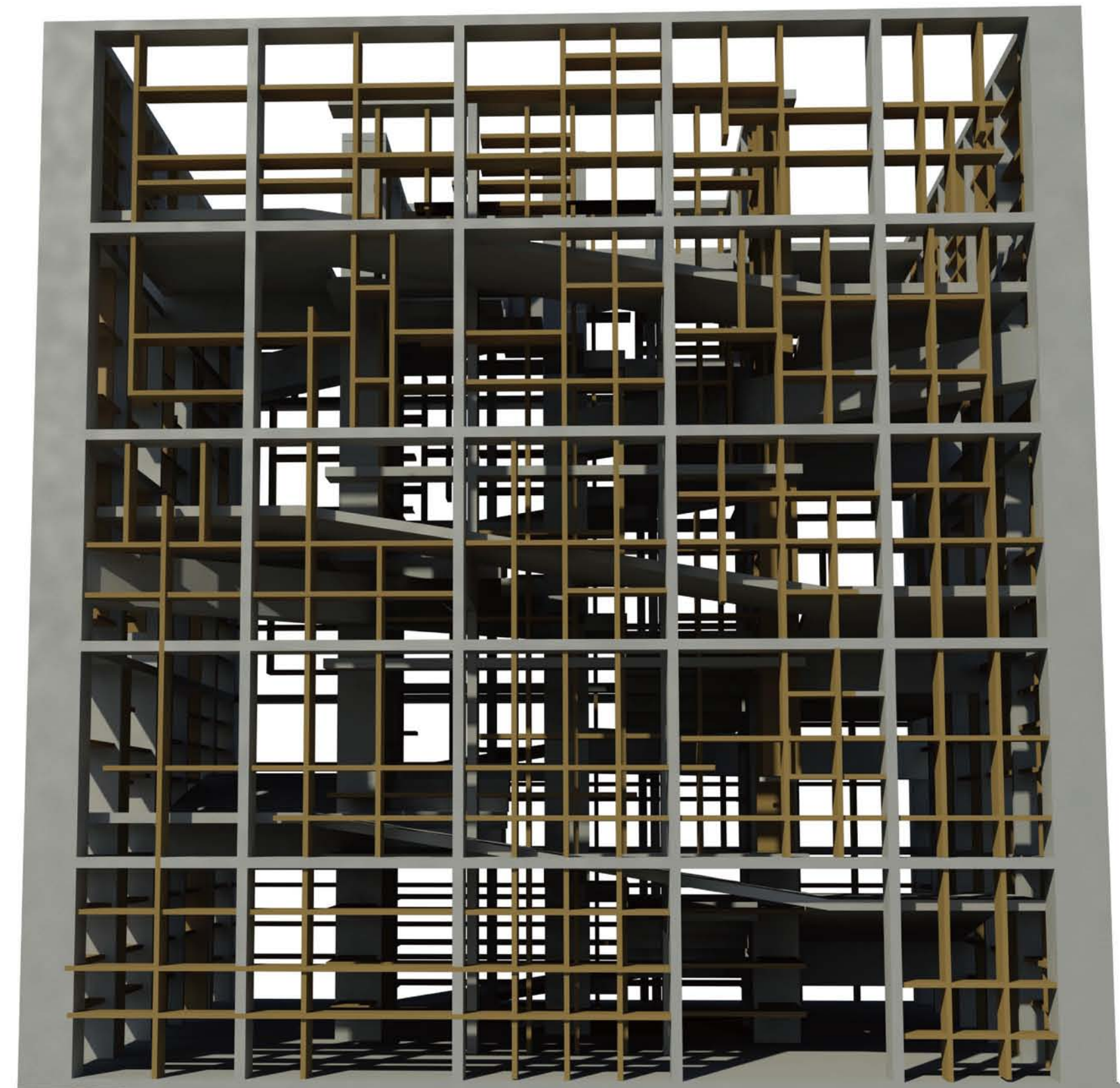
建築の空間は世界観を表現する。
雰囲気、イメージを生み出している。

モノの世界観を表現していく。
10×10×10の箱の中に、モノの世界観を詰め込む。
この箱は、表現する箱 架空の建築 箱庭ならぬ箱空間
詰め込まれた世界観は、
「表現する箱」の中の空間として表現される。



モノとヒト

新商品、流行品



ヒトの周りにはいつもモノが流れている。

だが我々は、ほとんどのモノを意識しない。

無意識に使い続ける。モノは次々と消費されていく。

私たちの関係は一方的。

ただ1つ、最初にそのモノと出会うとき、

その時だけは私たちの関係は異なる。

ヒトの周りにモノが漫然と溢れている状況とは違う。

ヒトがモノの世界に入り込み、そして探す。

互いを見つめ合うように。

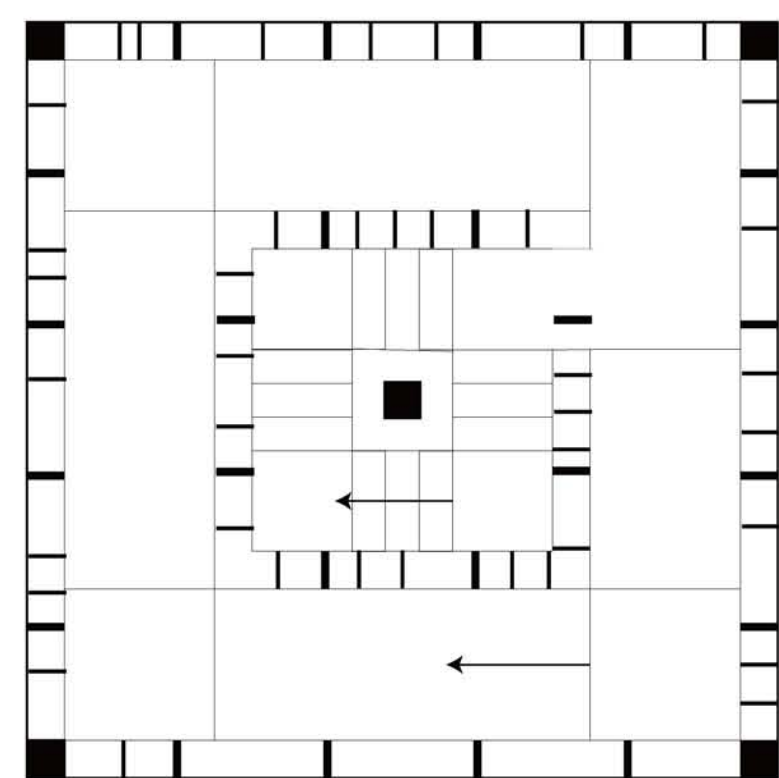
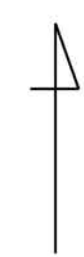
箱の中に押し込める———

ここではヒトがモノの周りを巡っていく。流れていく。

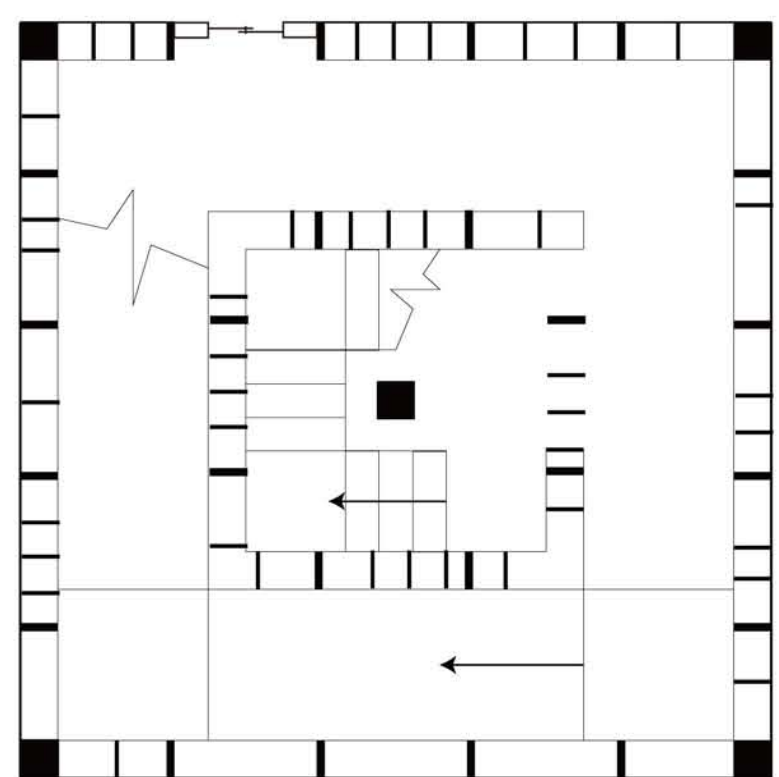
モノはただじっと待つ。

我々はモノと出会う為にグルグルめぐり、登り、順々に見つめていく。

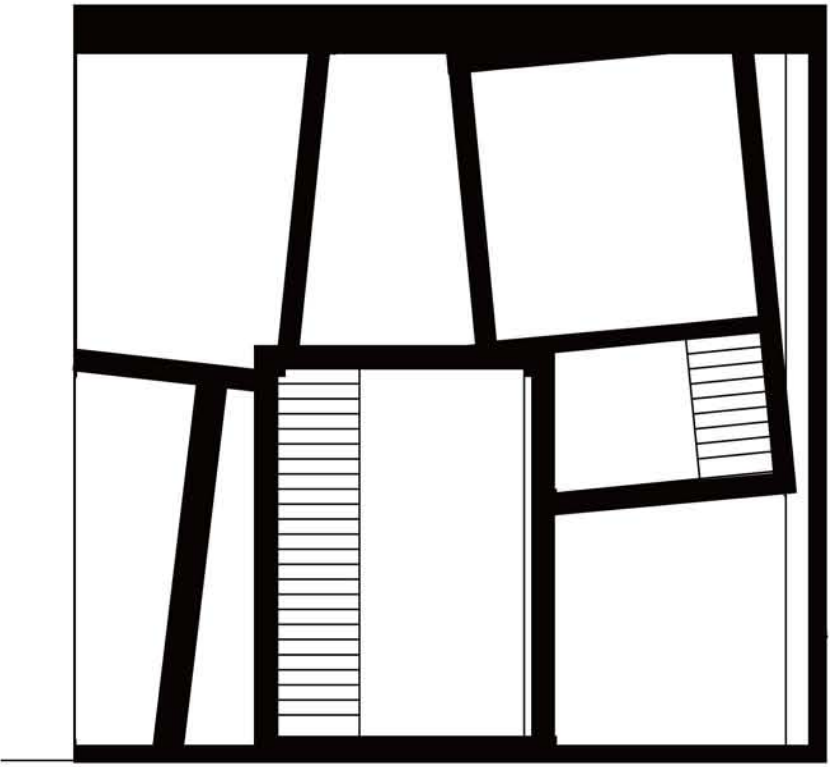
ヒトとモノが静かに見つめ合う空間。無言の対話をするかのように。



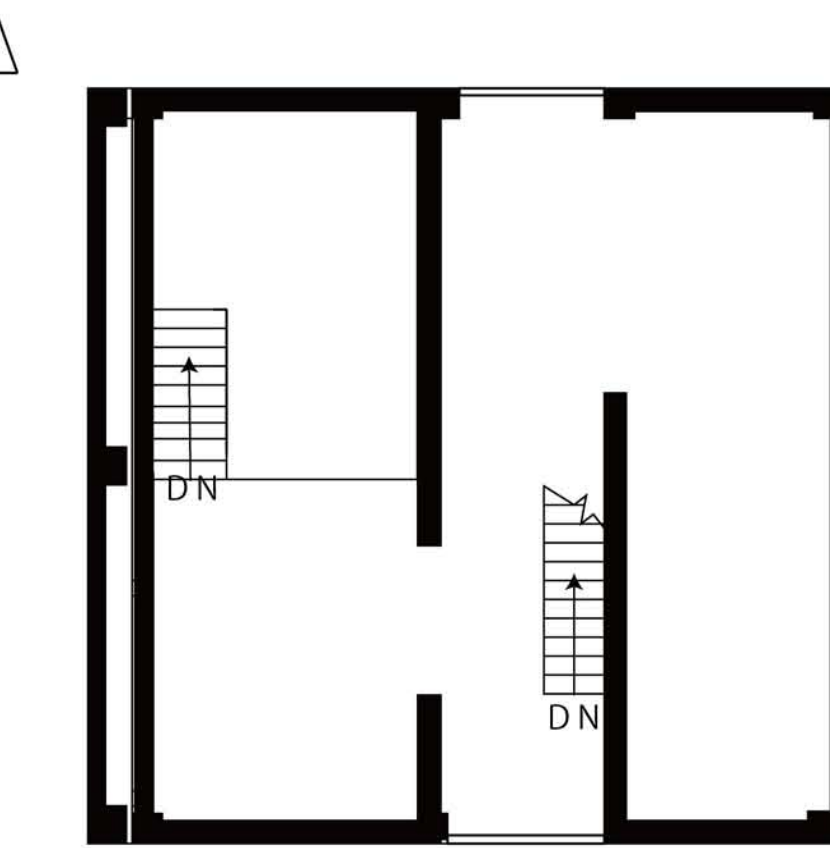
上層 平面図 S=1:100



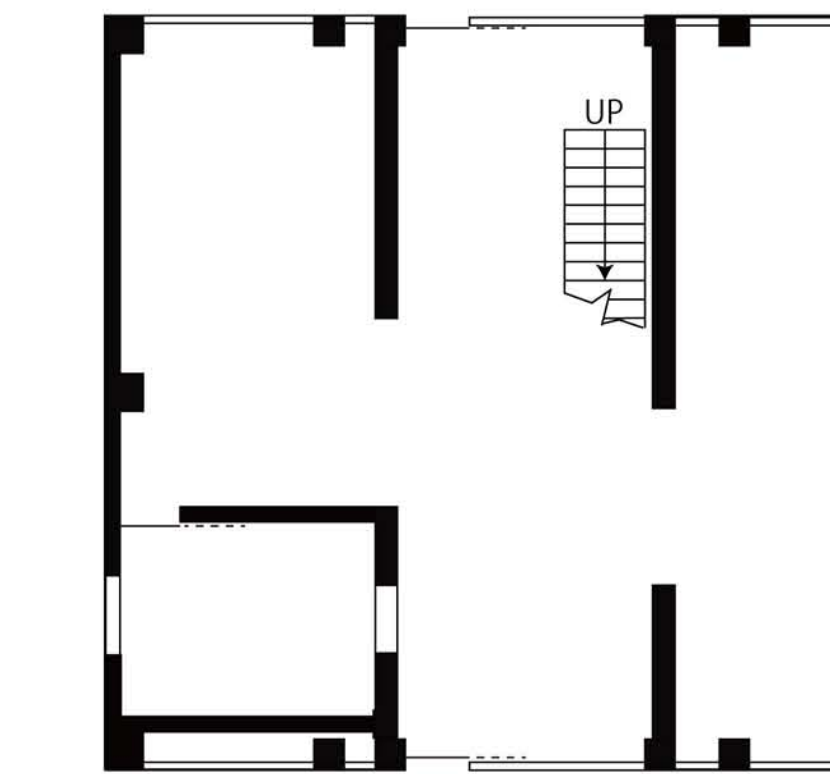
1階 平面図 S=1:100



断面図 S=1:100



2 階平面図 S=1:100



1 階平面図 S=1:100



既知と解放

服

私たちは服を着ている。

それはなぜか。

私たちは服を着なければならない。

人間特有のルール。着なければならない。

社会が服を通して私たちを規定する。

服を身にまとい、服が私たちを束縛する。

一方で、服は私たちが社会に向ける顔である。

自分で作り上げる顔、自己表現の手段である。

ただ姿をさらすのではない。服によって、自分を社会へ解放する。

服には束縛と解放がある。

箱に押し込める——

私たちは、水平・垂直な壁に囲まれて暮らしている。

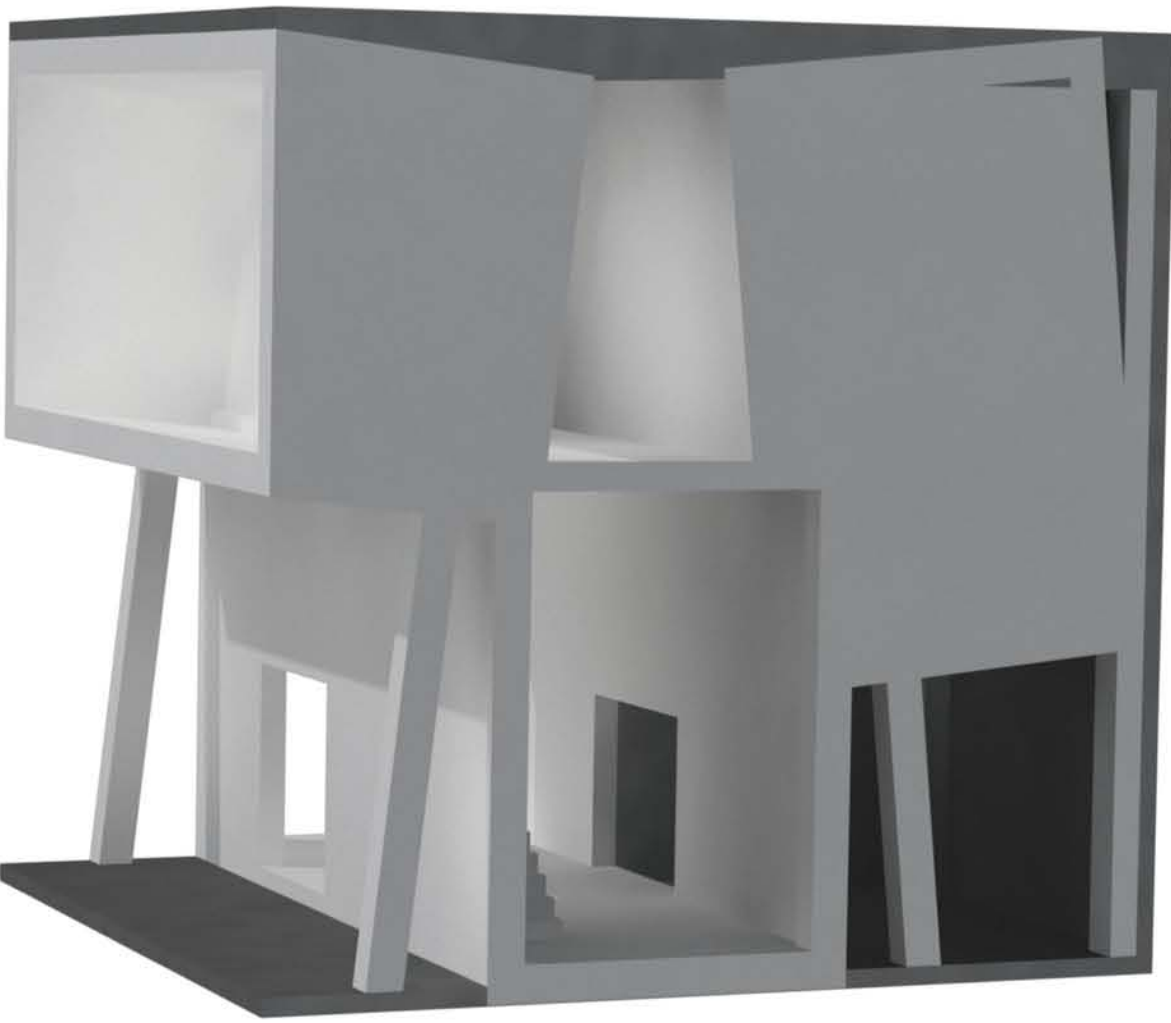
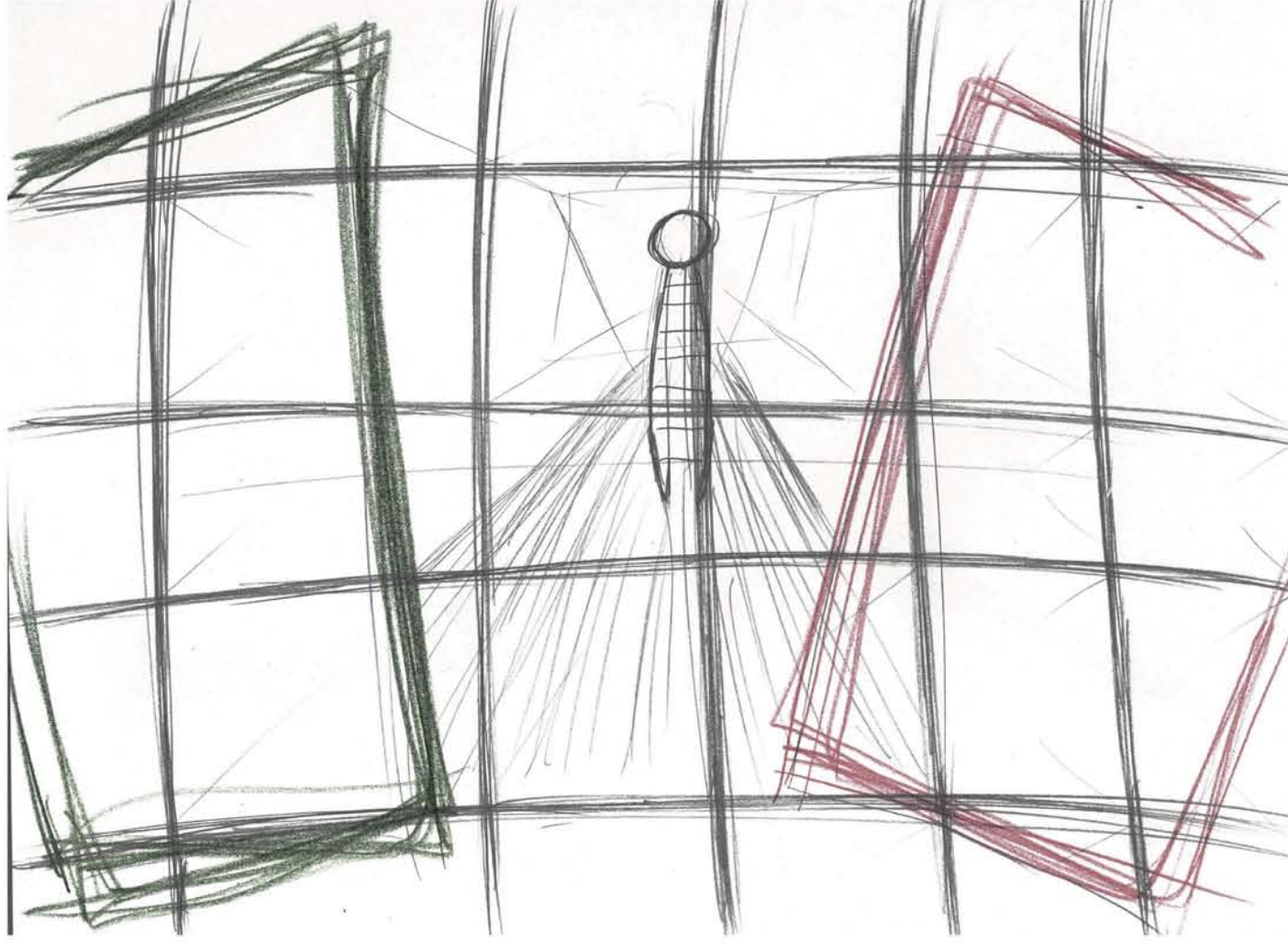
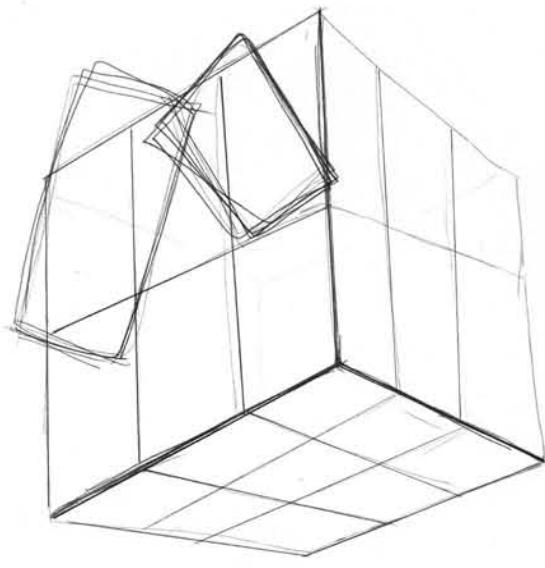
その決まった枠組みは、私たちの感覚を規定する。

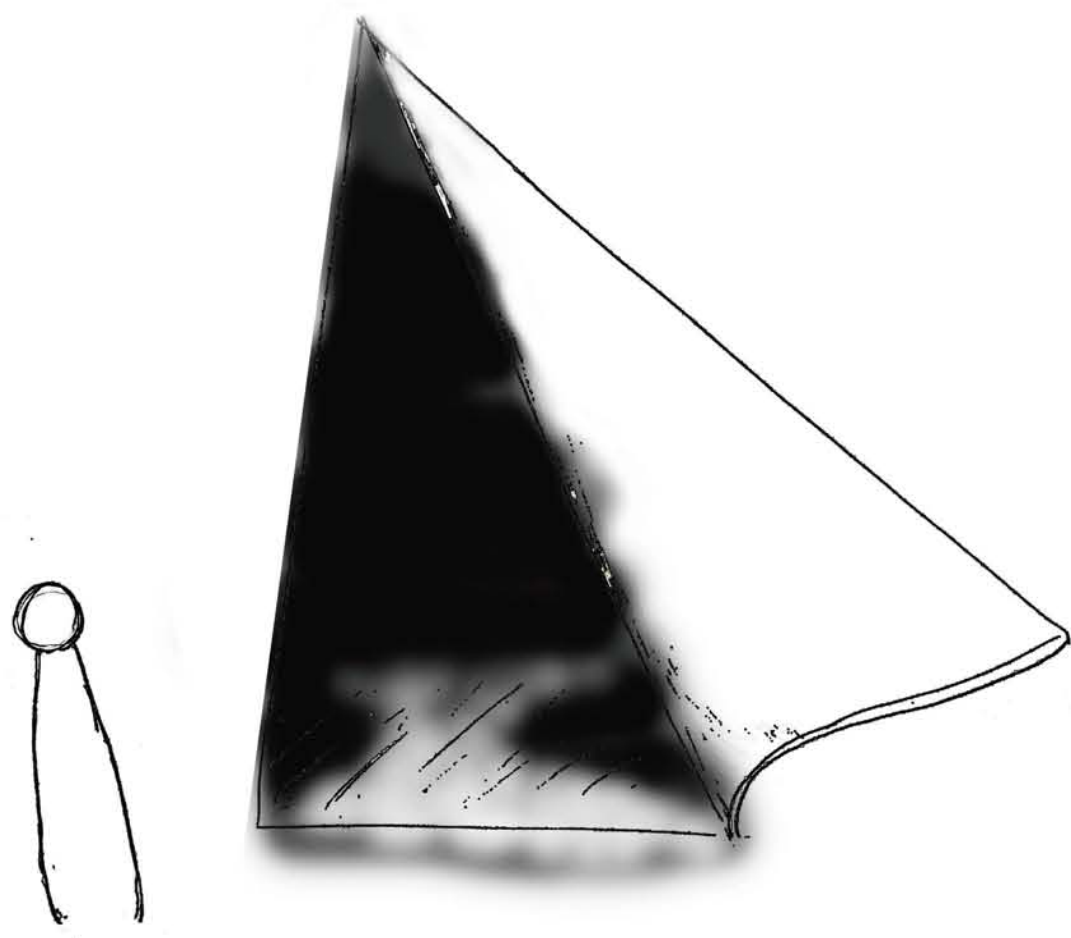
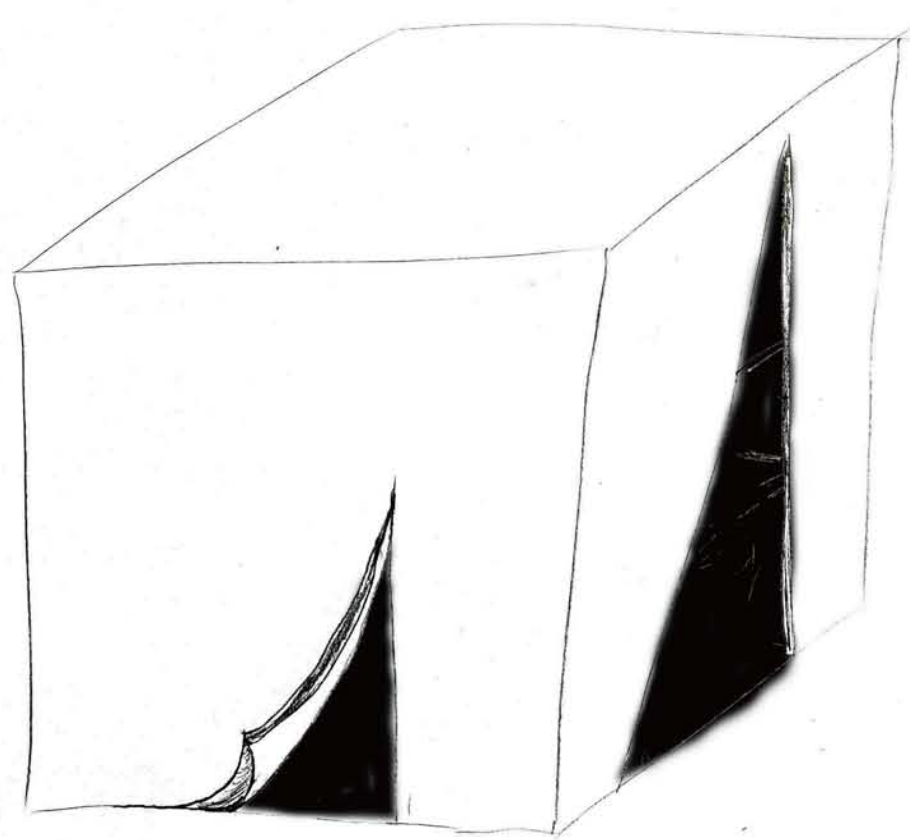
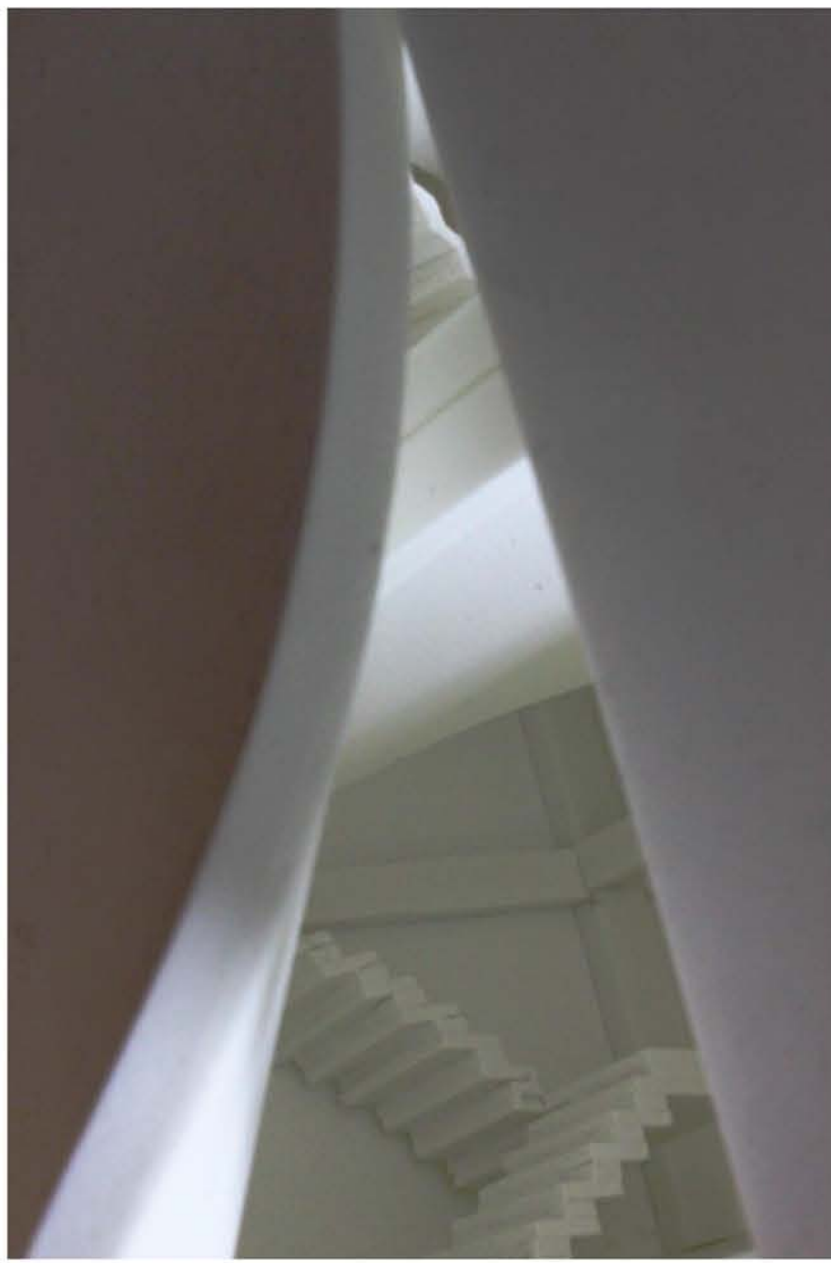
水平・垂直そこに2つの傾いた部屋を入れる。

水平・垂直の既知の空間と、そこから解放された空間。

それらは隣り合い、互いの空間に影響を及ぼし合う。

それらが共にある空間。





空間の境界線

スイーツ

一口。味がすぐさま口に広がる。

私たちが味覚の世界へと引き込む。

現実ではない、1つの感覚の世界。

魅惑的な世界。

1つのスイーツに味覚が詰まっている。

私たちに快楽を与える味の詰まった塊。

それは私たちが虜にしている。



それは境界線である。

空間の境界がめくれる。

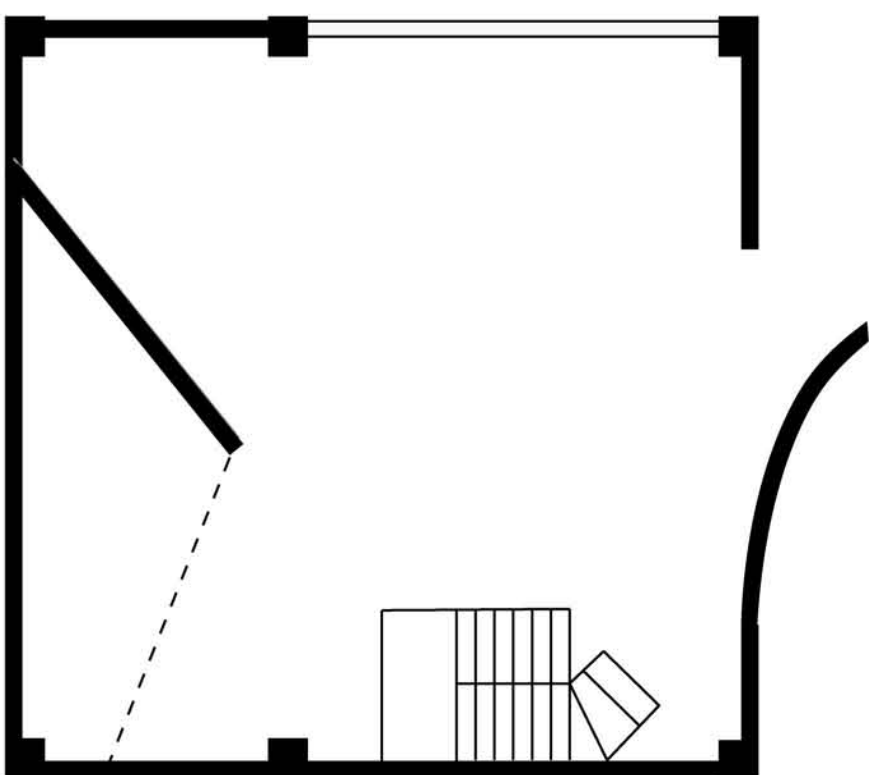
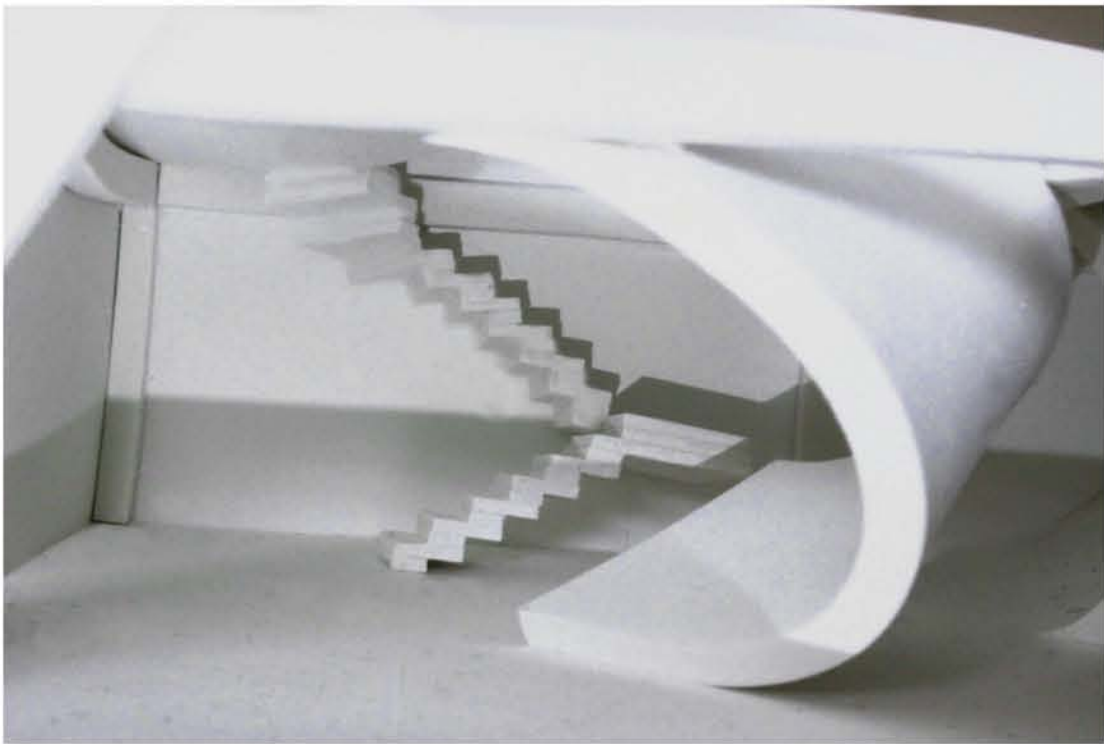
めくれる面が、曲線を描く。

その隙間から、私たちは中に入る。

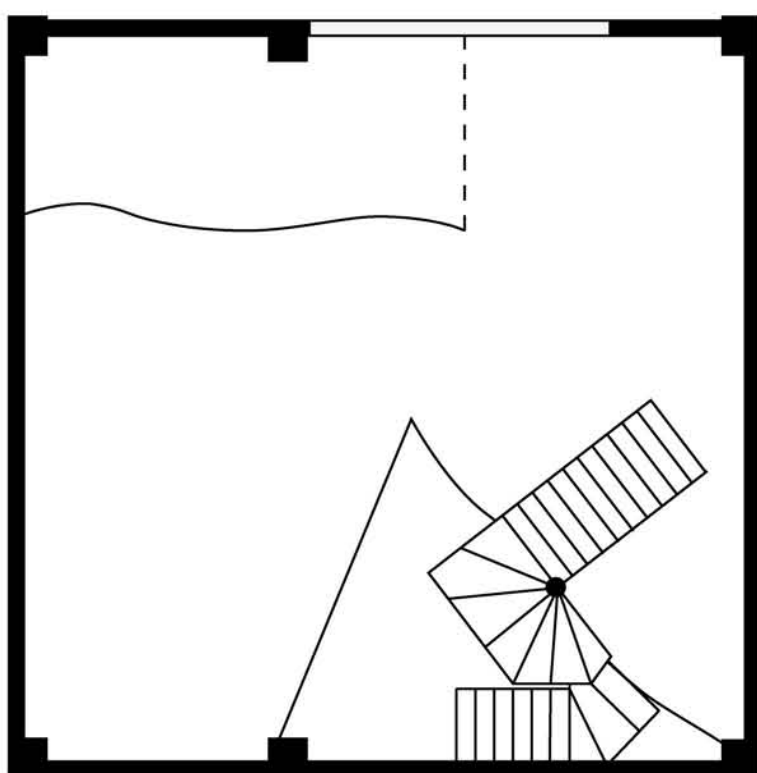
現実ではない不思議な空間に入り込んでいくような感覚。

現実とは違う世界へ入り込んでいくような

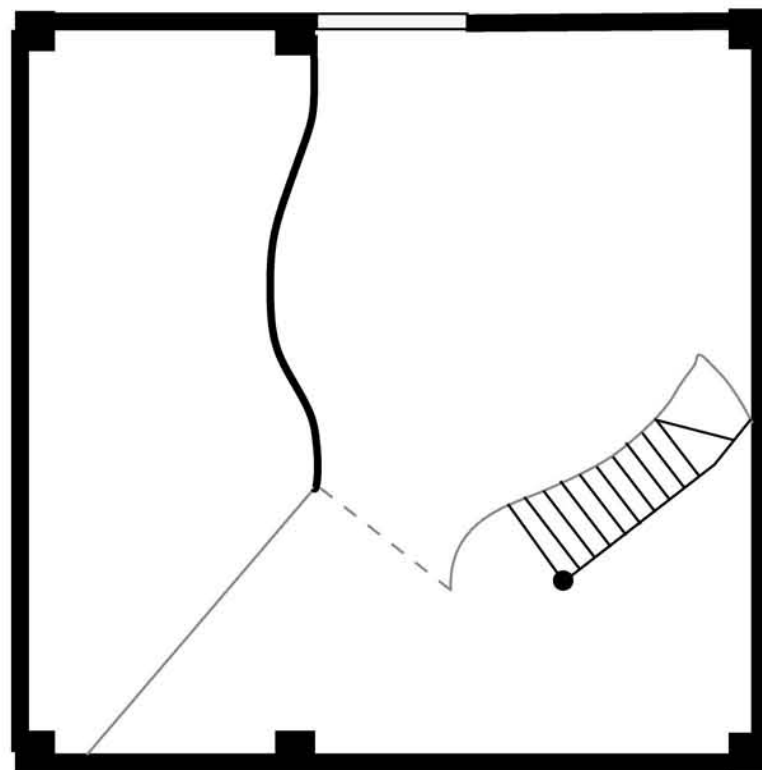
箱に押し込める



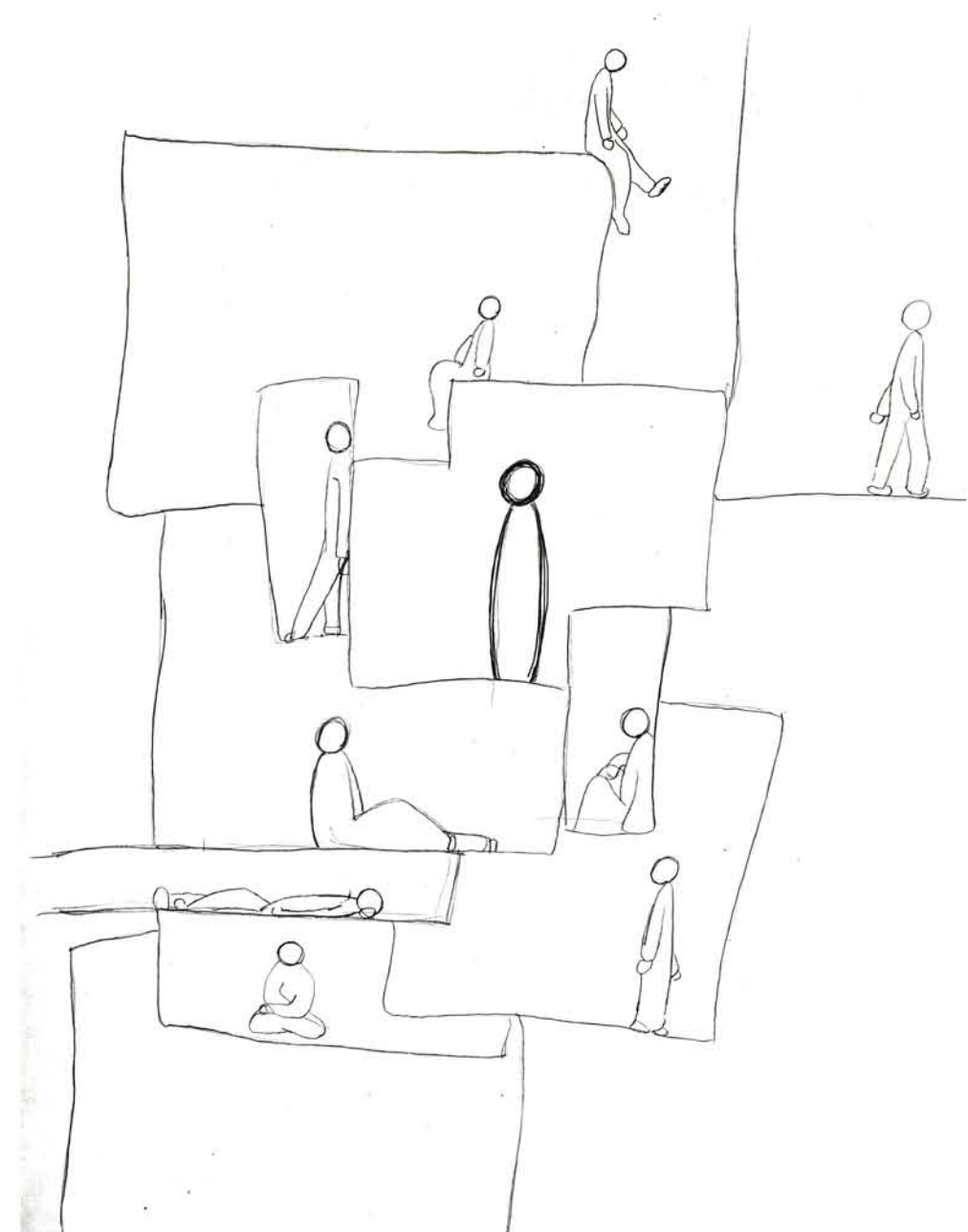
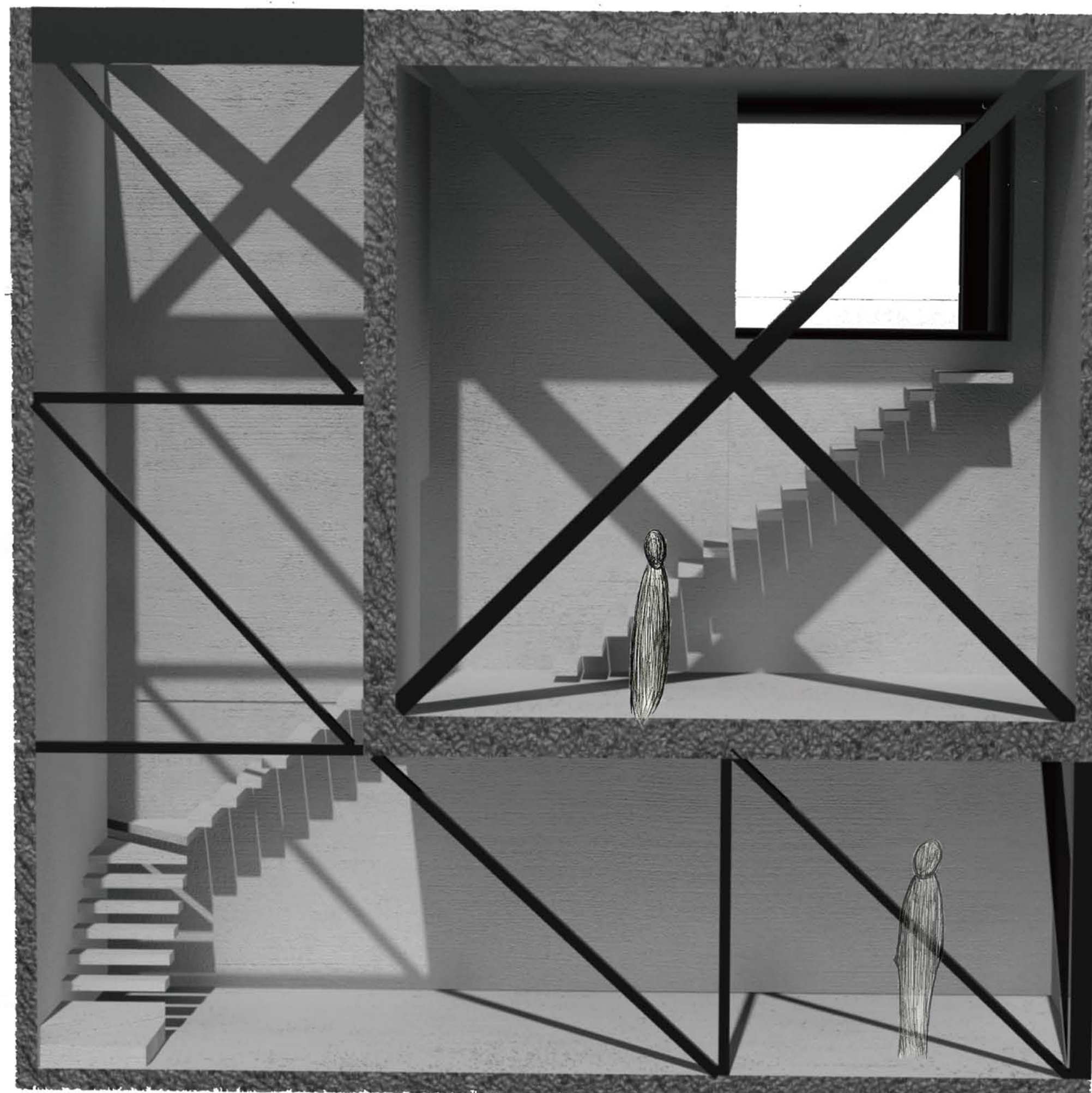
1 階平面図 S=1:100



2 階平面図 S=1:100



3 階平面図 S=1:100



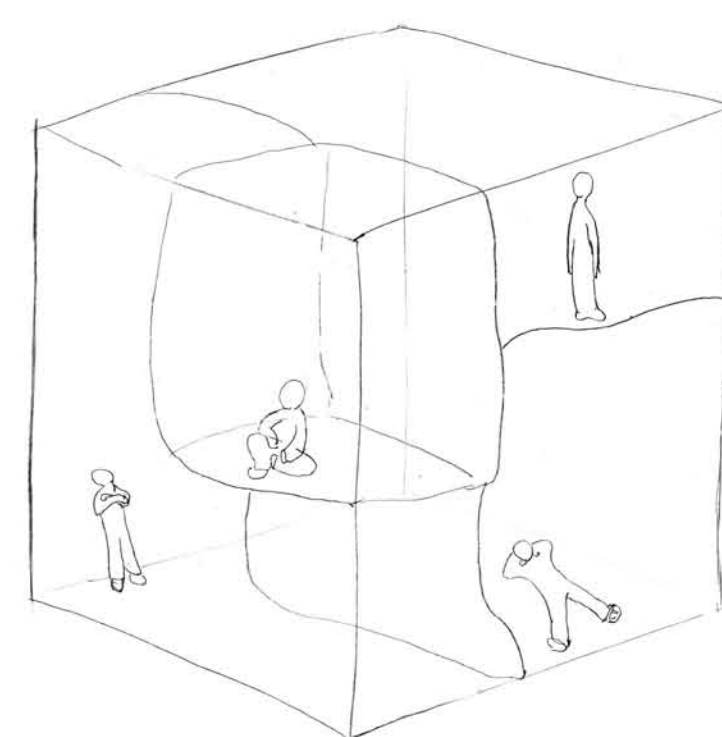
人はみんなこの1つの世界に生きているが、
我々の感性、感じる「世界」はまるで違っている。

私たちは、1つの世界に生まれながら、
私は、まったく別の「世界」に生きているようだ。

同時進行していくパラレルワールド。

芸術家、彼らは世界から、「世界」を見いだす人達だ。
そして私たちに表現する。

それは私の世界とは違う「世界」への入り口。



箱に押し込める——

ひとつの箱＝世界の中に存在しているが、ここには4つの
「世界」が同時進行している。

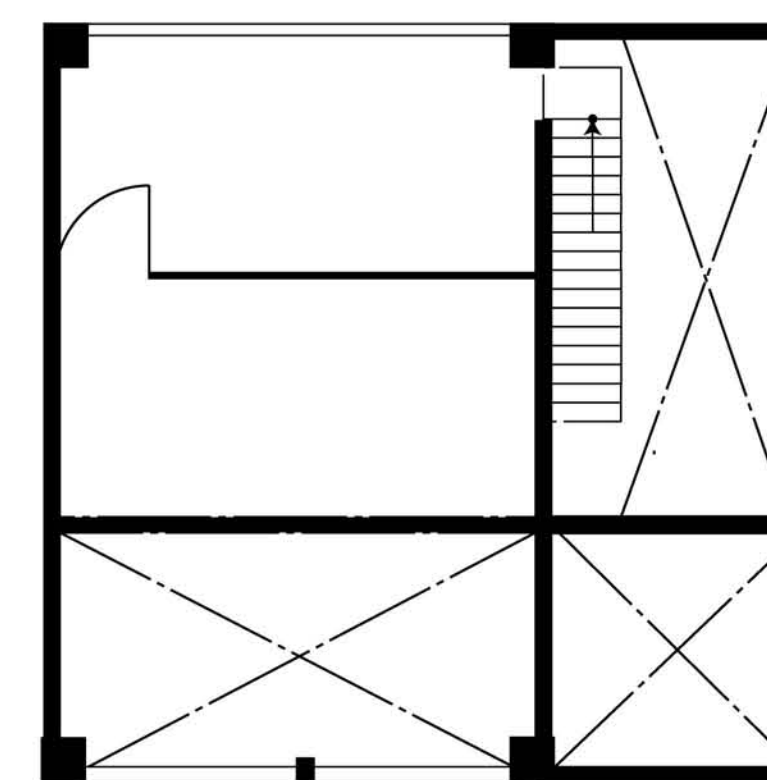
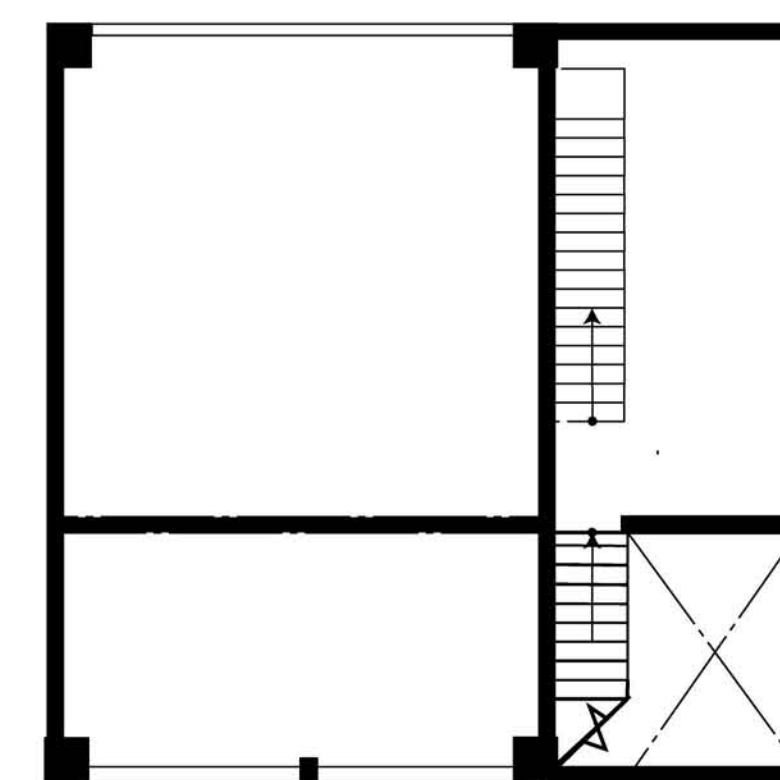
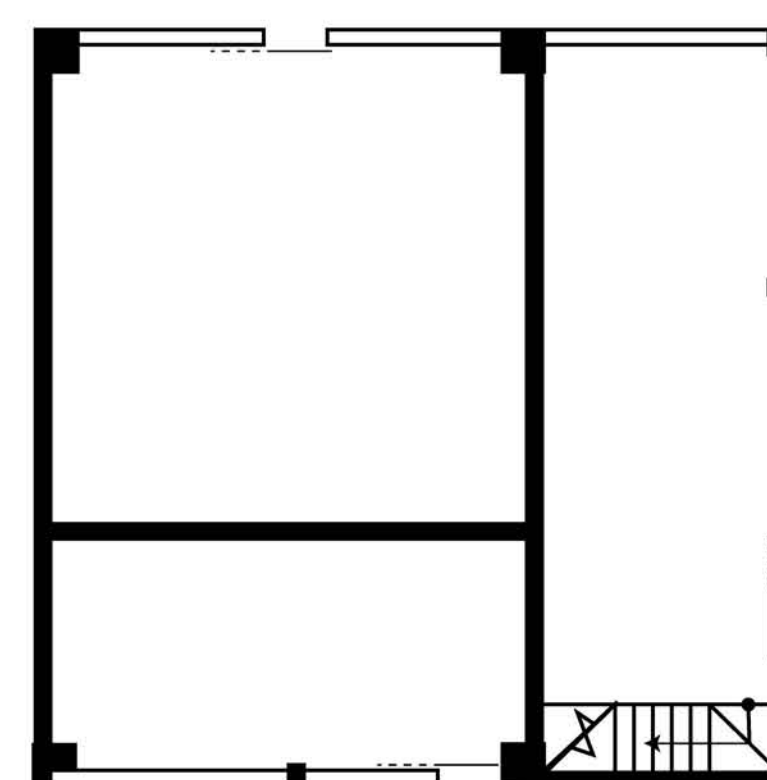
4人の芸術家が集う場所。

彼らの表現する「世界」は他者から独立して存在している。
部屋には、芸術家達のそれぞれの世界が広がる。
しかし彼らの世界は、隣り合っているのだ。

私たちは彼らの「世界」を順々に訪れ、
4つの「世界」を旅することとなる。

4つの平行世界

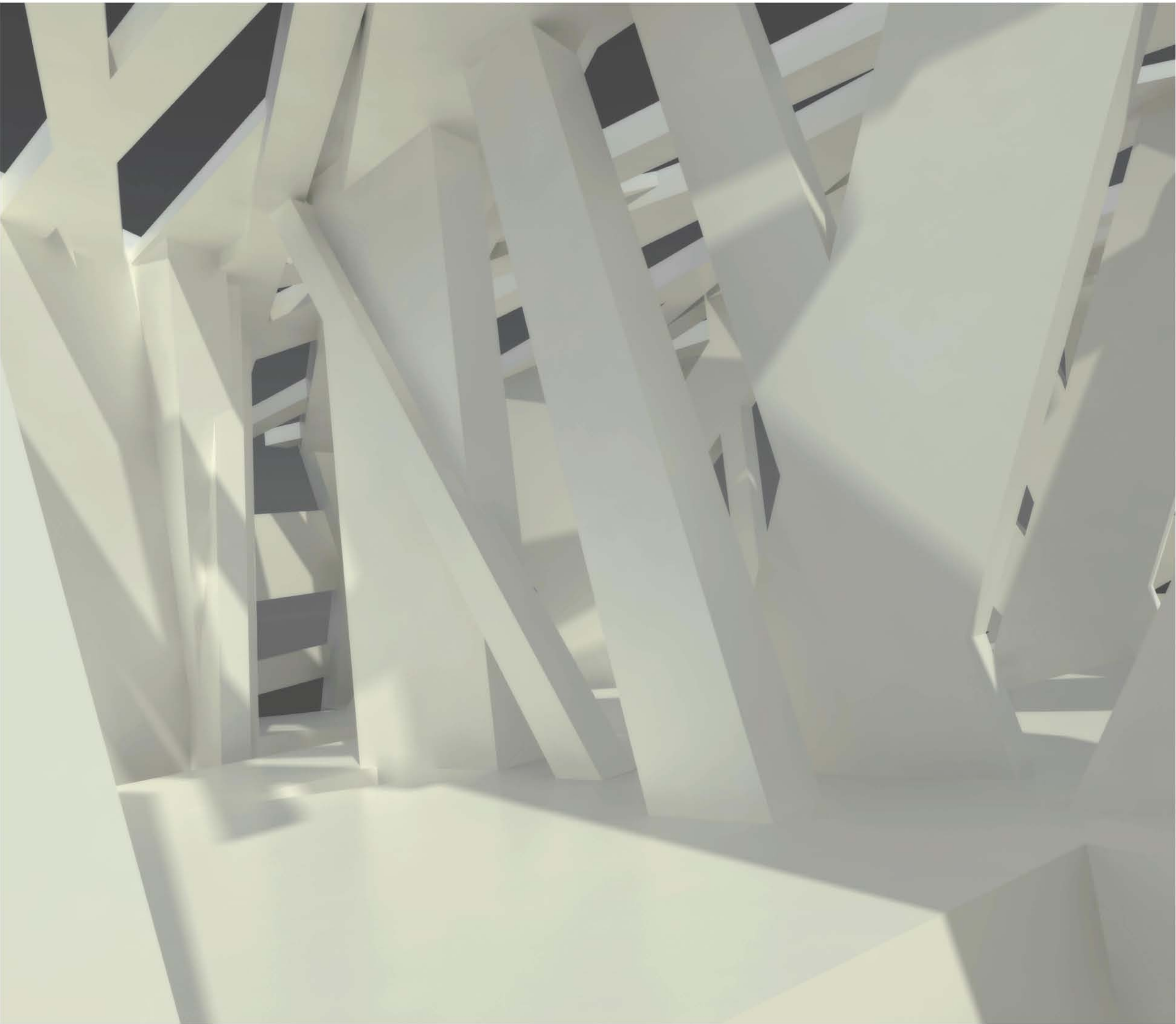
美術作品（ギャラリー）



1階平面図 S=1:100

2階平面図 S=1:100

3階平面図 S=1:100



線の世界

jewelry

我々の世界とは別の世界からきたような存在。

異物 異端 悠久な存在 そういう美しさ。

異空間で生まれ永遠の時間を経て形成されたような。

その神秘さ 不可侵さ 怪しさ そういう魅力。

超自然的な存在。

我々はその姿に魅惑させられる。

いつの時代も惑わされる。

箱に入れ込む—————

直線 という異物

鋭い線がランダムに走り 重なり合い 空間が形成される

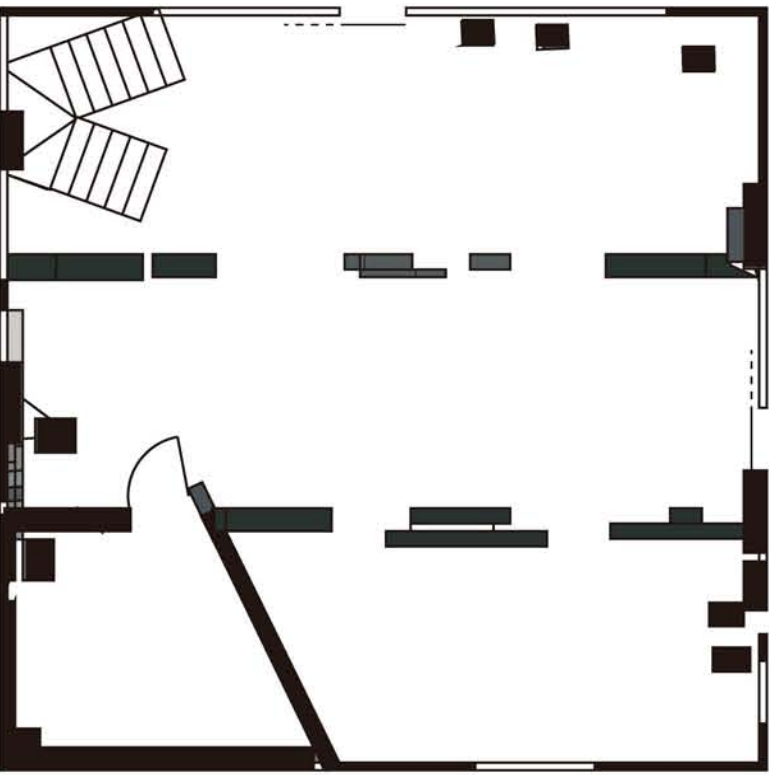
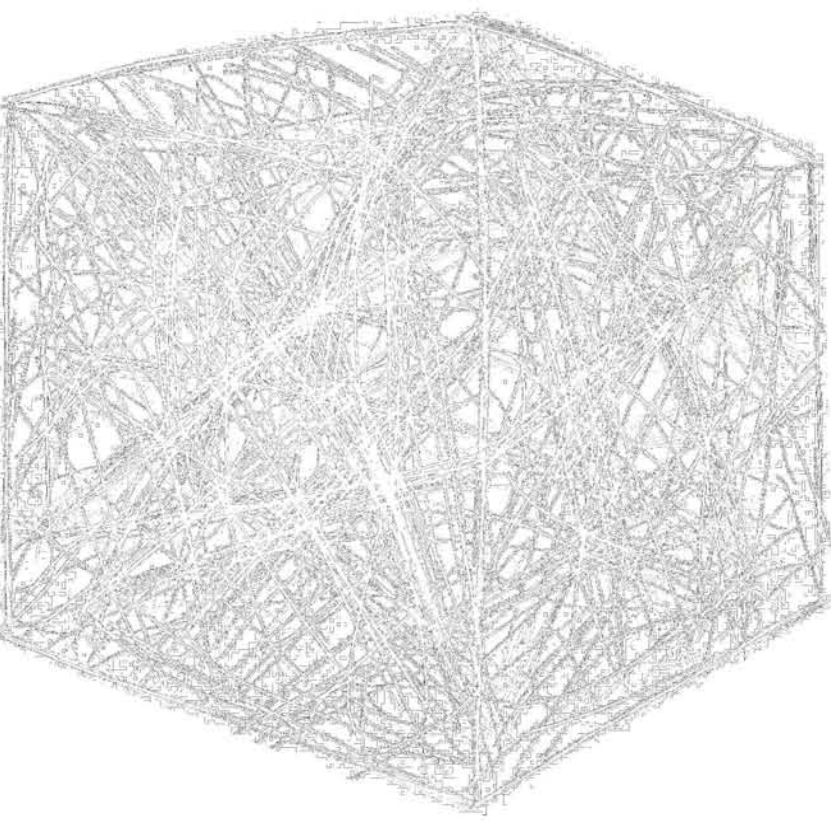
直線が床になり、壁になり、柱になり、天井になる

全てが線から構成される 線による空間

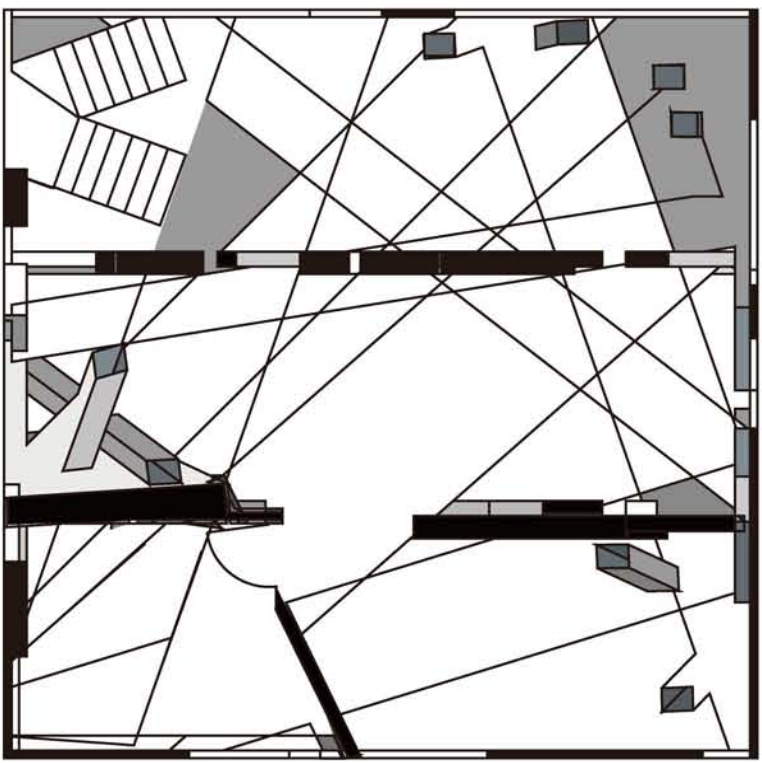
線の中に埋もれた 押しつぶされた 隙間の空間

まるで、どこかの別世界

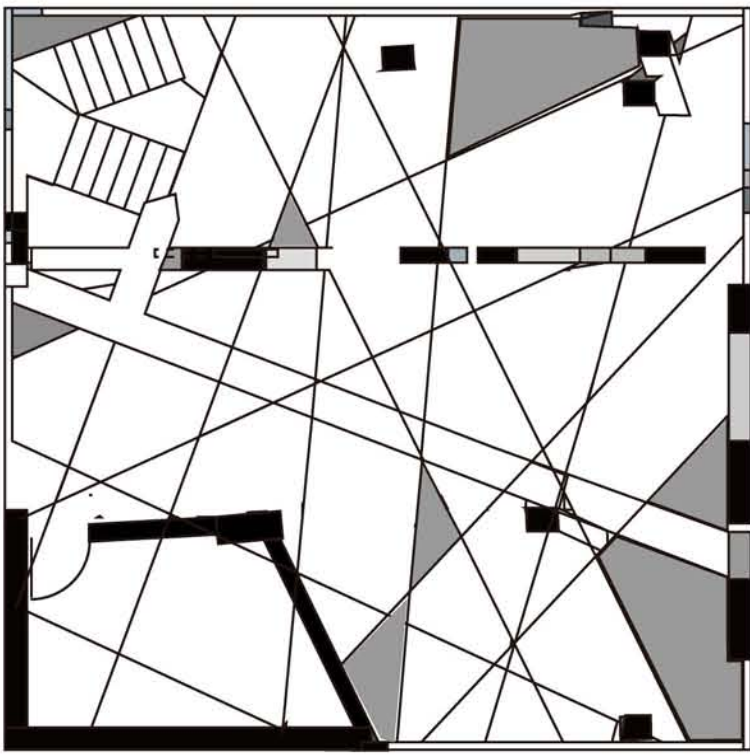
鉱石の中に入り込んだような 地下深くに入り込んだような



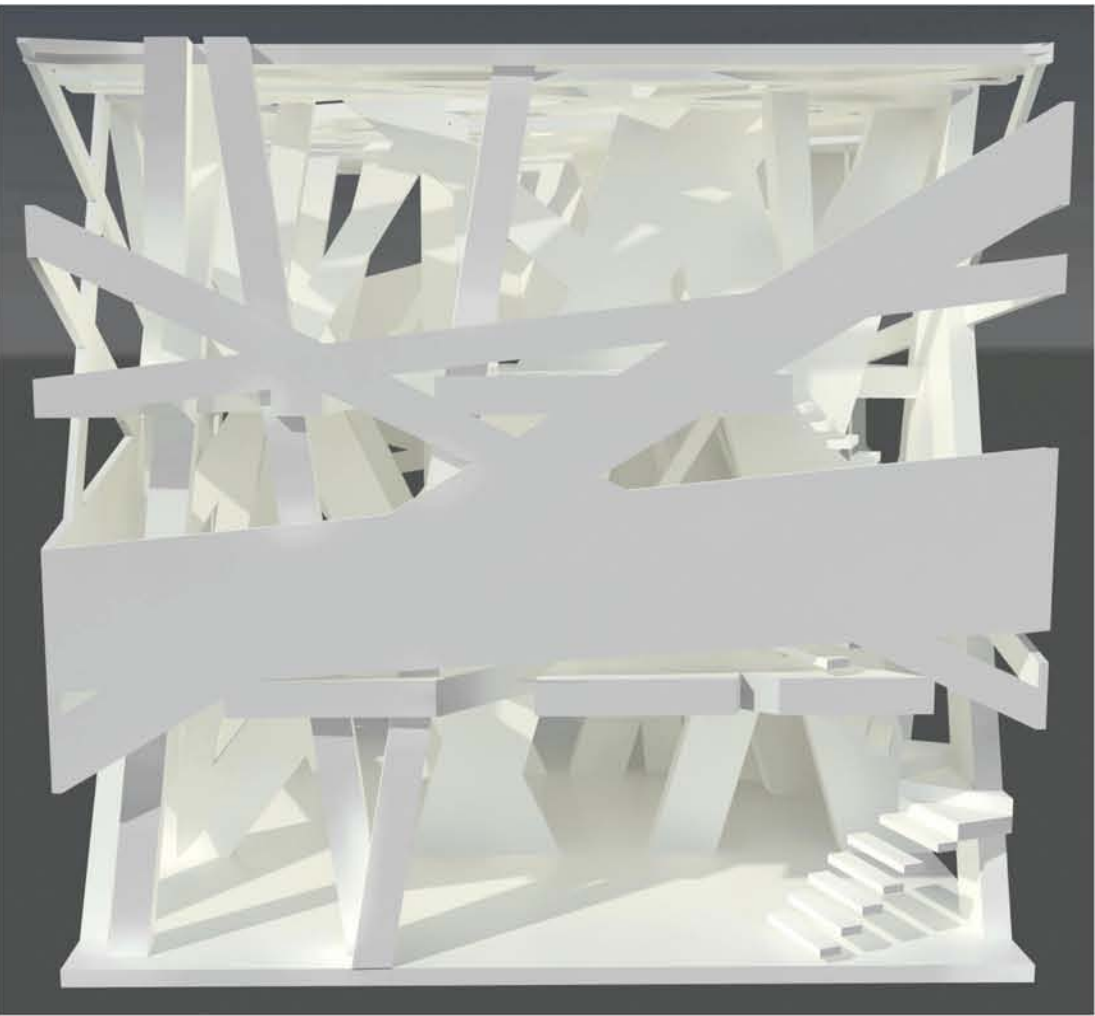
1 階平面図 S=1:100

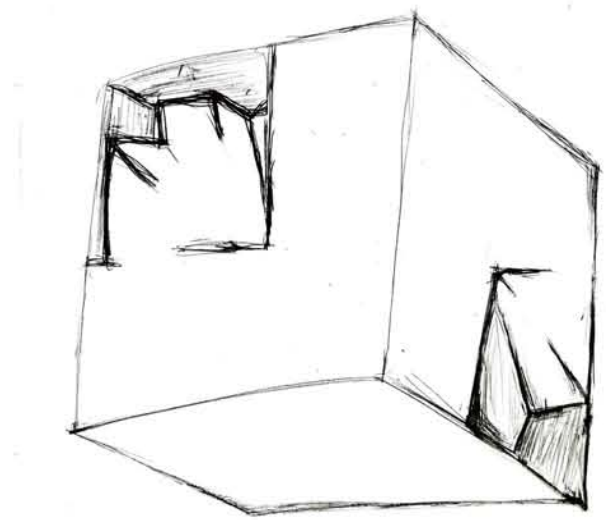
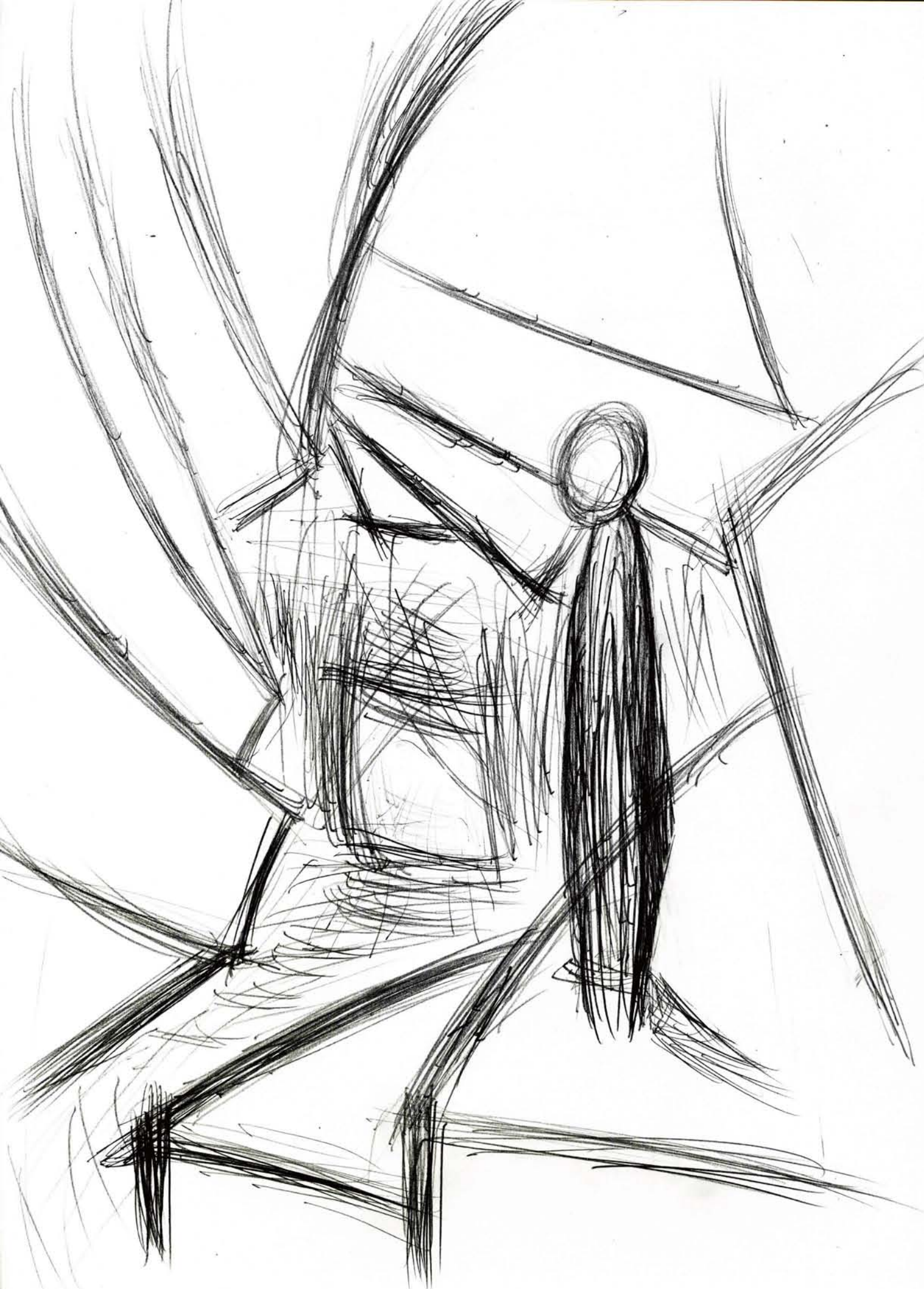


2 階平面図 S=1:100



3 階平面図 S=1:100





展開する空間

古書

本に描かれた物語。

人から人へ、古書自身の歩んだいくつもの物語。

そしてこれからさらに歩いていく物語。

古びた紙、擦れた文字、汚れ、折れ目

古書からはたくさんの物語を感じる。

古書の一冊に、物語が縦横無尽に広がっている。

箱に押し込める

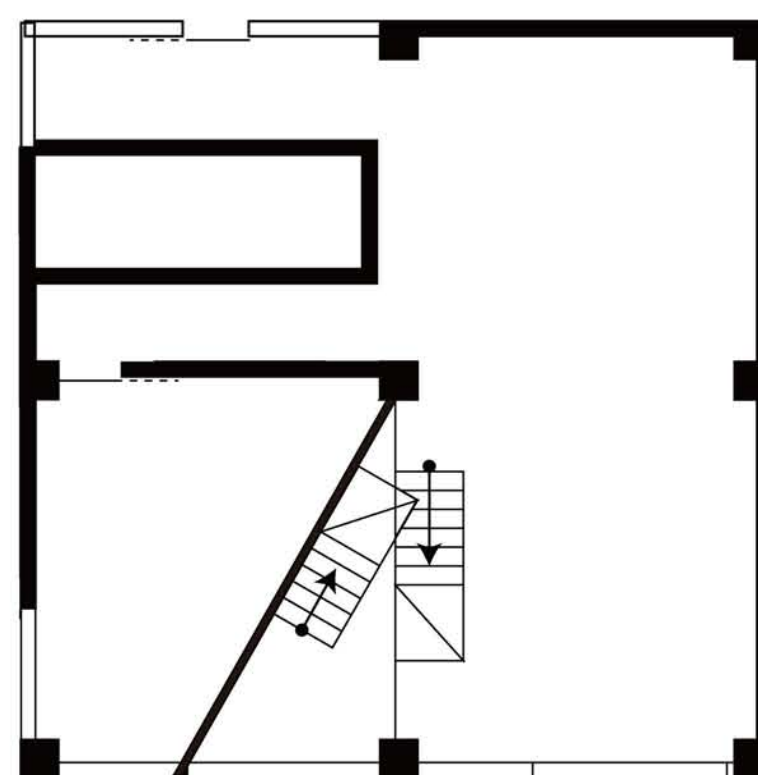
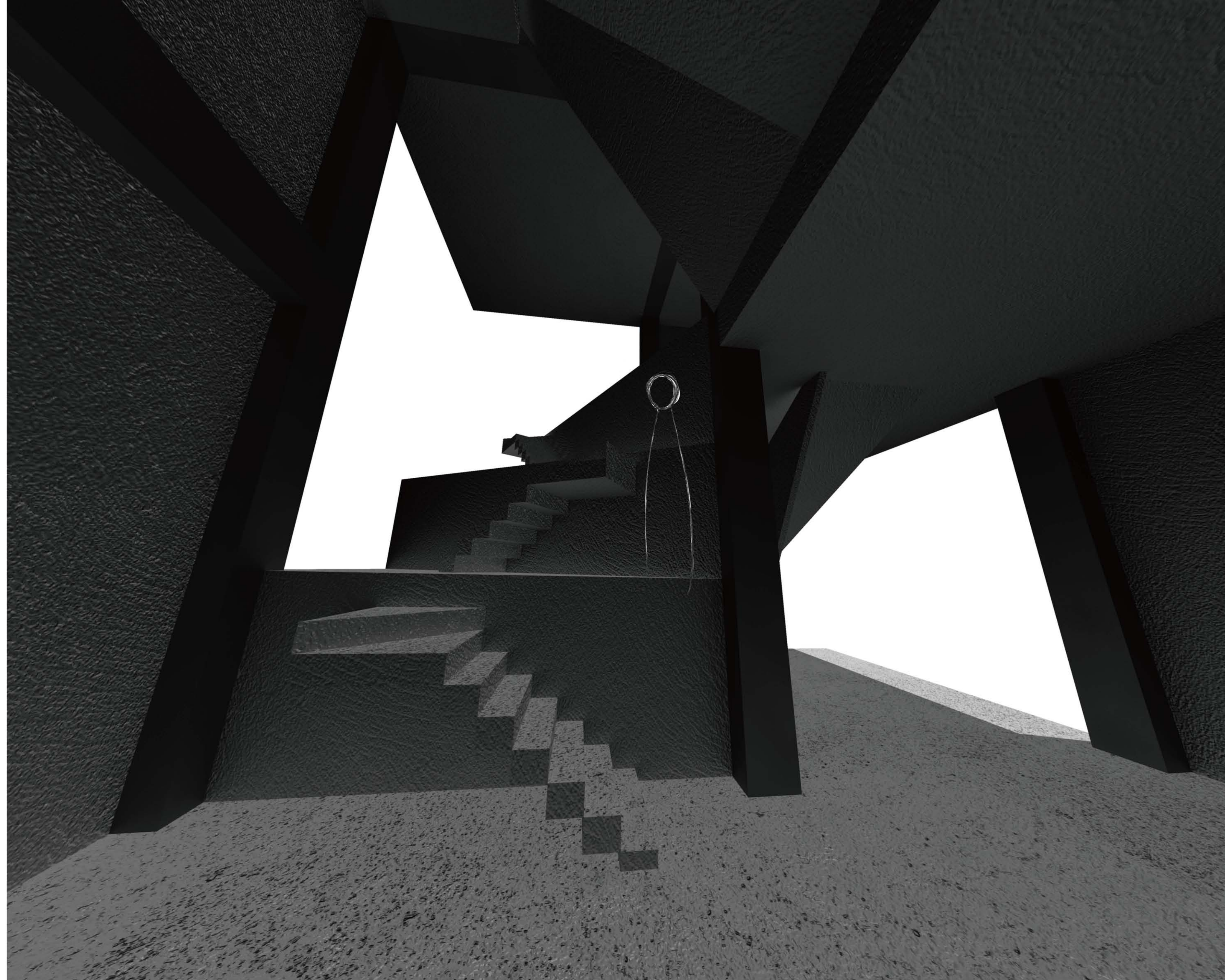
X 軸方向 Y 軸方向 Z 軸方向

壁が回転しながら押し寄せる。

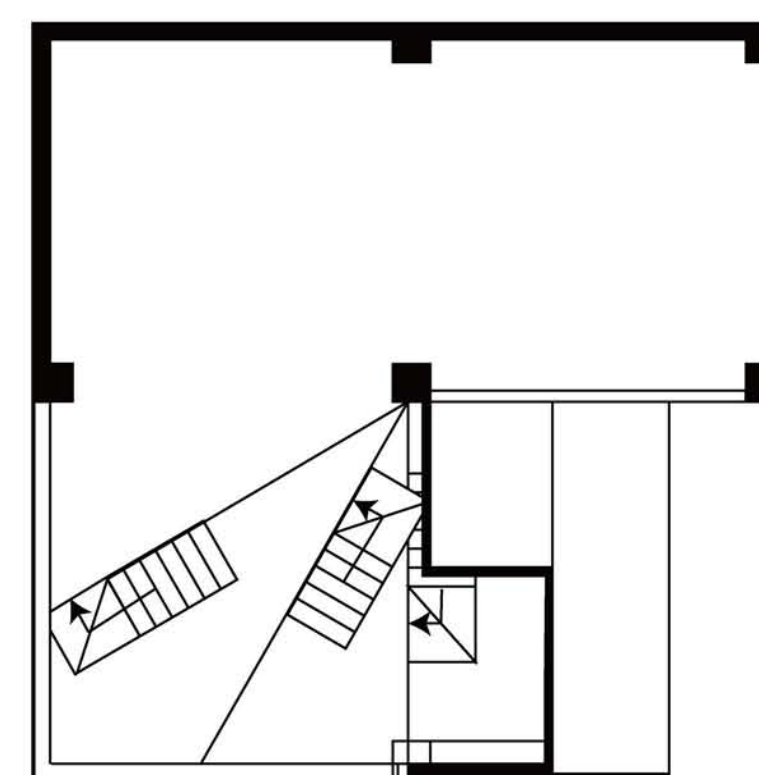
そこを私たちは進む。進む。空間は次々と変わっていく。

空間は、四方八方に展開していくのだ。

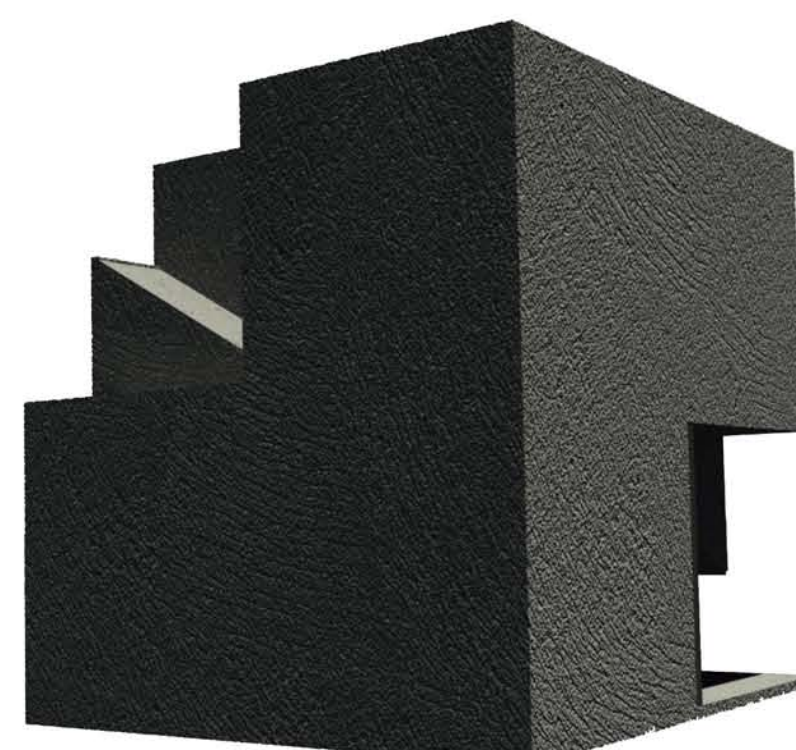
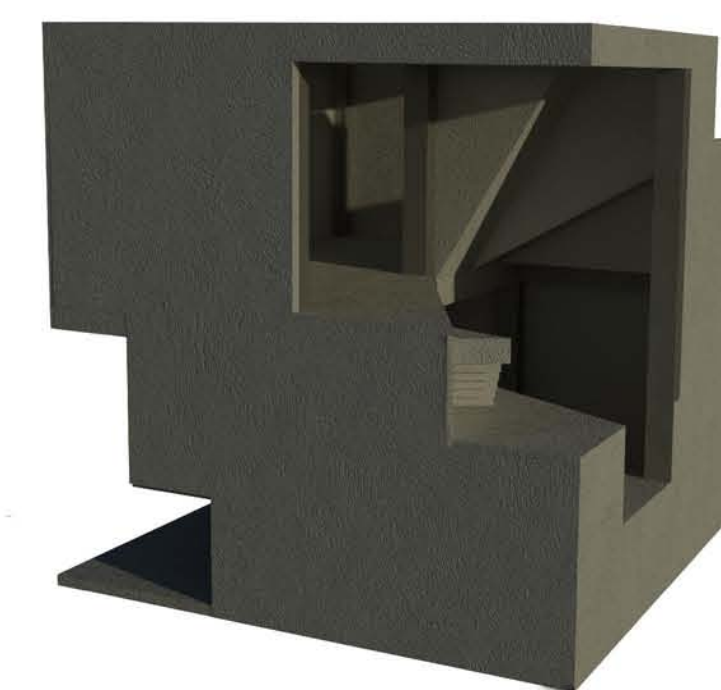
私たちは物語をめくるように、空間を進んでいく。

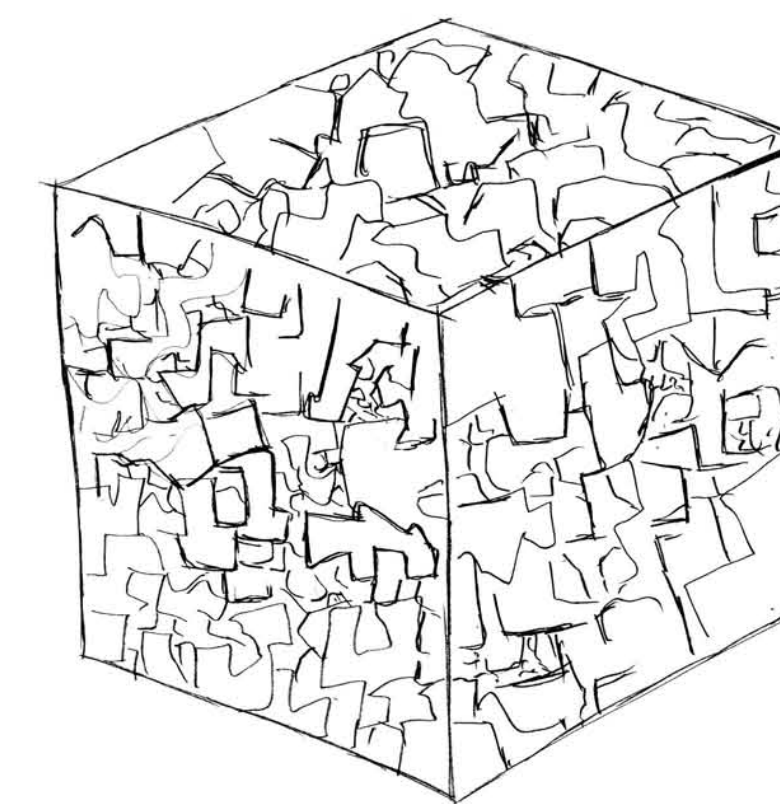


1 階平面図 S=1:100



2 階平面図 S=1:100





分裂と共存

キーホルダー、人形

1つ1つはバラバラの小さな存在。

それは1人の人間の下に集う。

人の好みのもと集められるのではない。

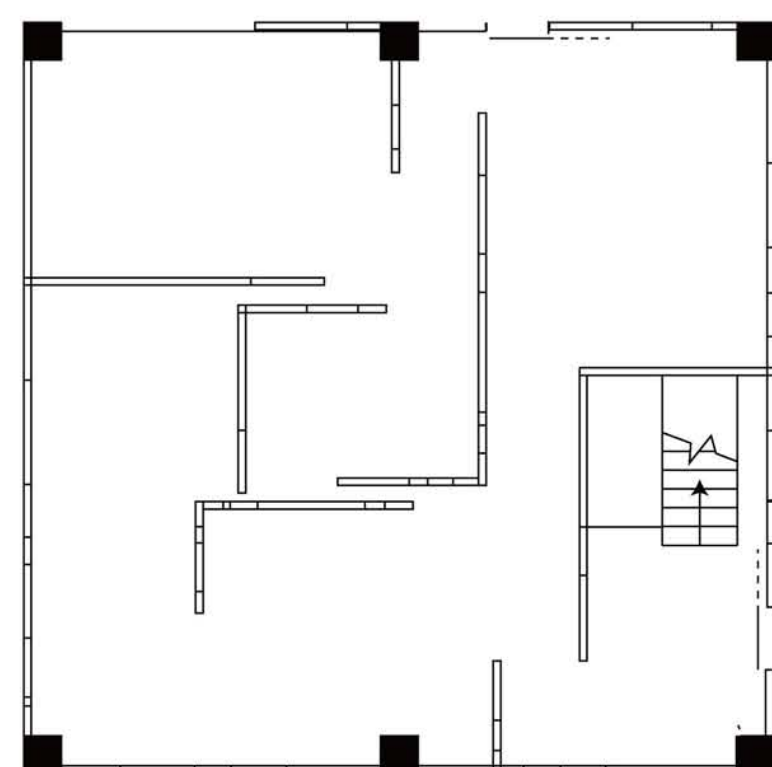
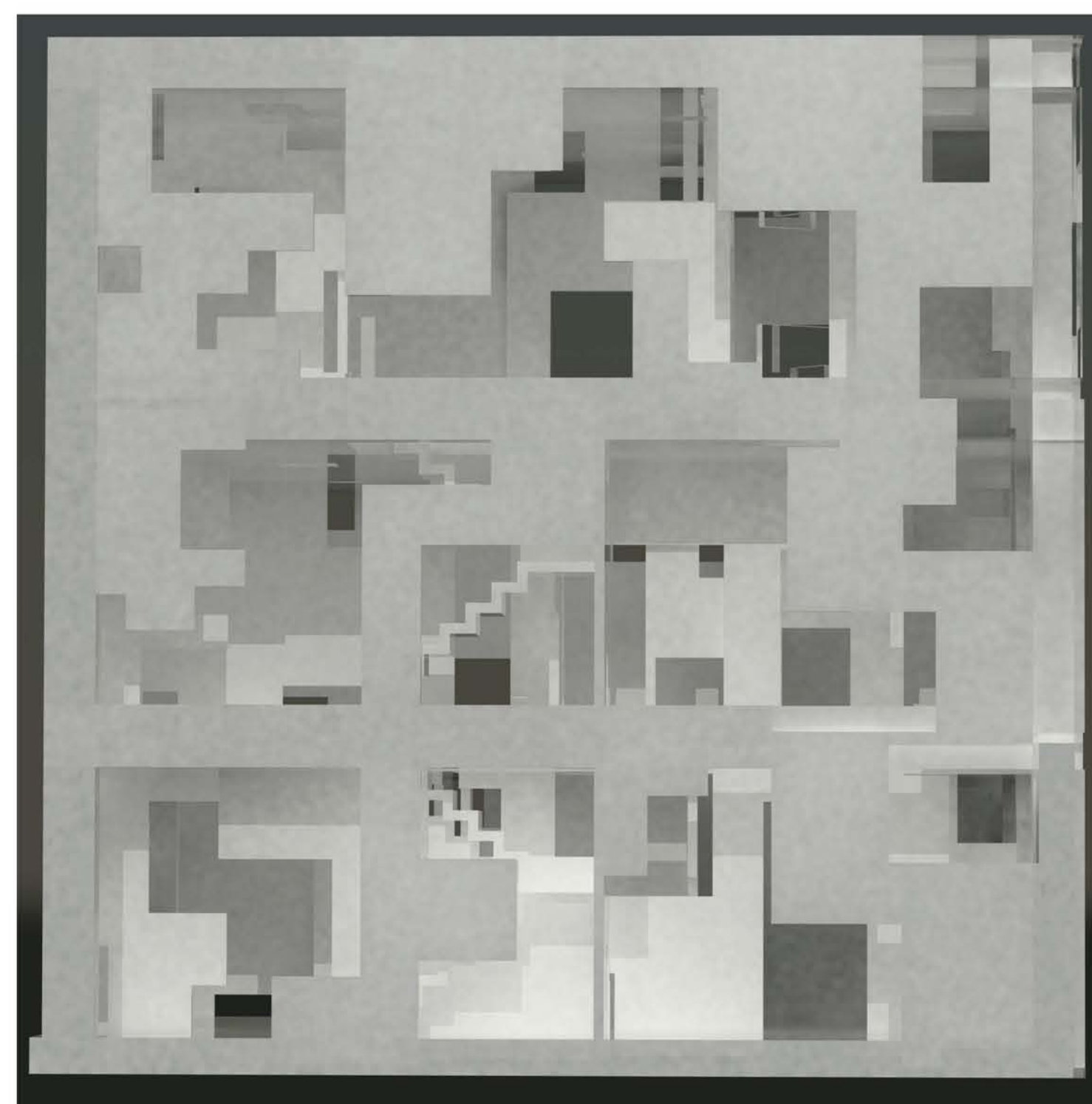
小さな存在が私たちの中に好みを見いだすのだ。

私たちは小さな存在に自分の好みを開拓される。

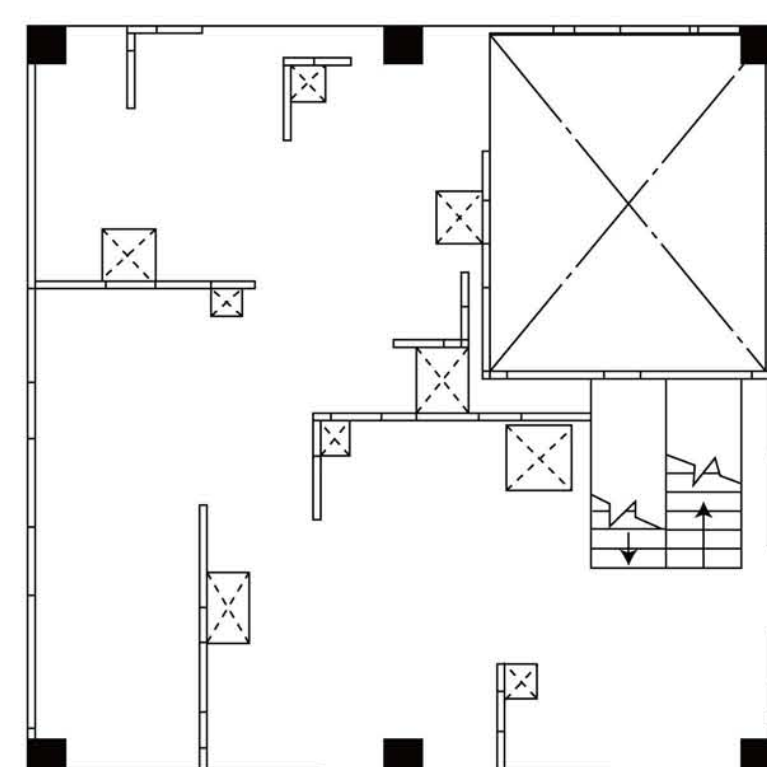
彼らが私たちの世界に生まれ、育ち、私たちの世界は広がる。

小さな存在が、私たちの世界の中で、

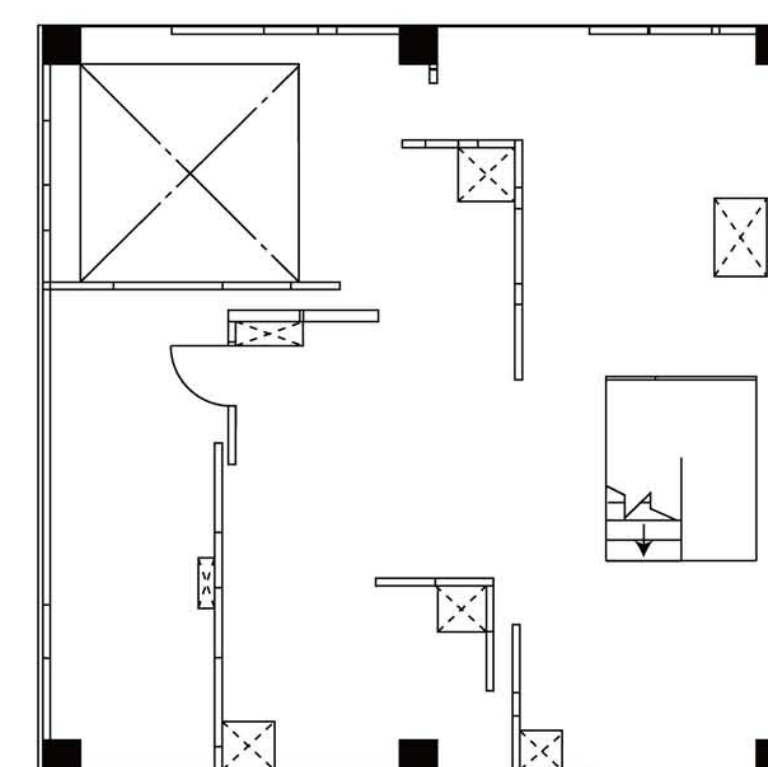
ばらばらにボコボコと生まれ、互いを隔てることなく共存し育っているのだ。



1 階平面図 S=1:100



2 階平面図 S=1:100



3 階平面図 S=1:100

箱の中に押し込む——

ボコボコと穴の空いた壁、仕切り。

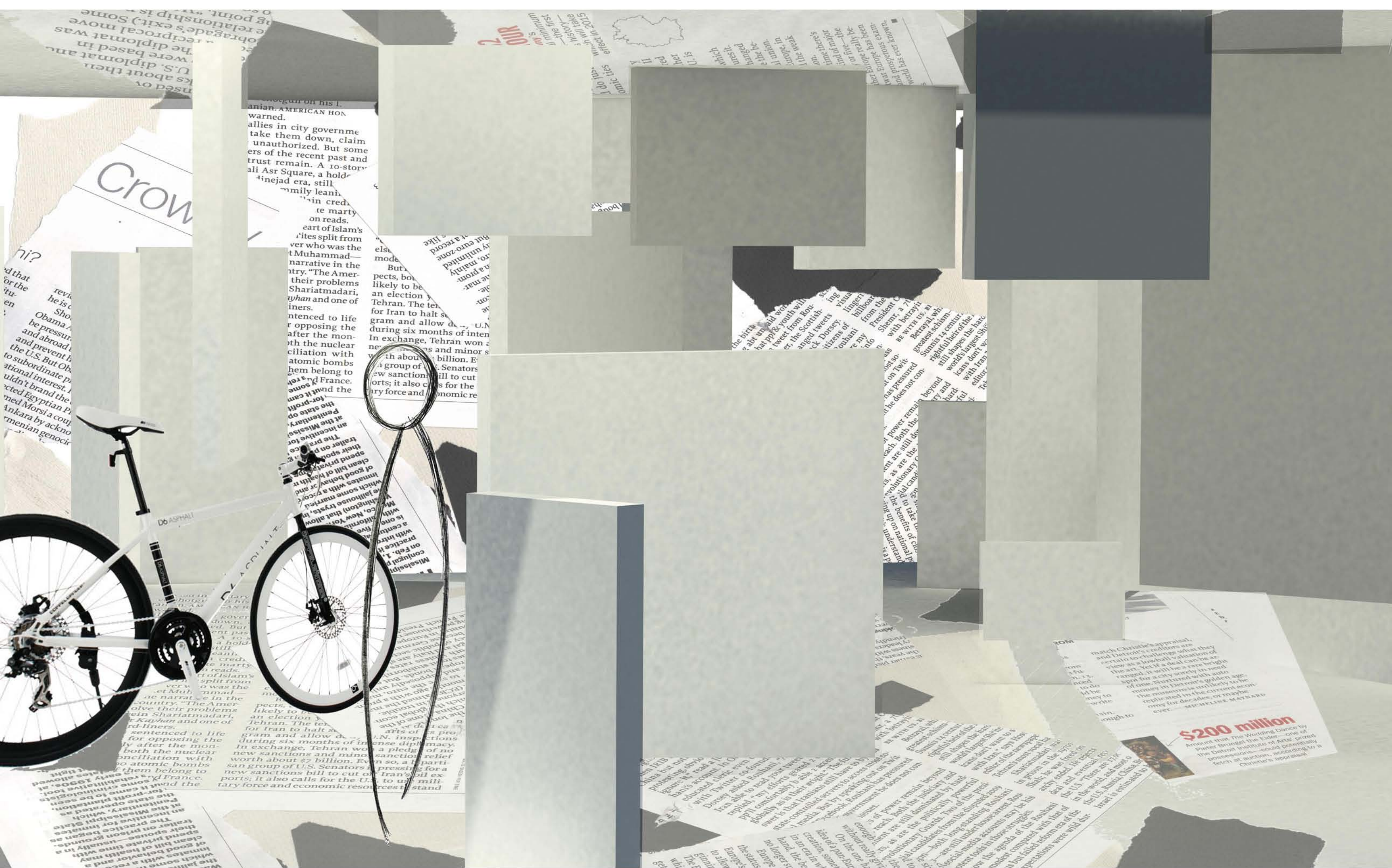
壁は組み合わせり、空間は分かれる。

穴の空いた壁は、パズルのよう。

すると残される空白もパズルのよう一枚となる。

壁と空白が繋がり合い、空間は途切れる事なく、広がる。

壁は共存し、1つの空間ができあがる。



躍動する地図

クツ、自転車

クツや自転車、それは私たちにとって、動く、というイメージの象徴。

自らの足で動く。それを連想させる。

動いているときの世界は躍動感に満ちている。

自分の周りのすべてが変化している、動いている。

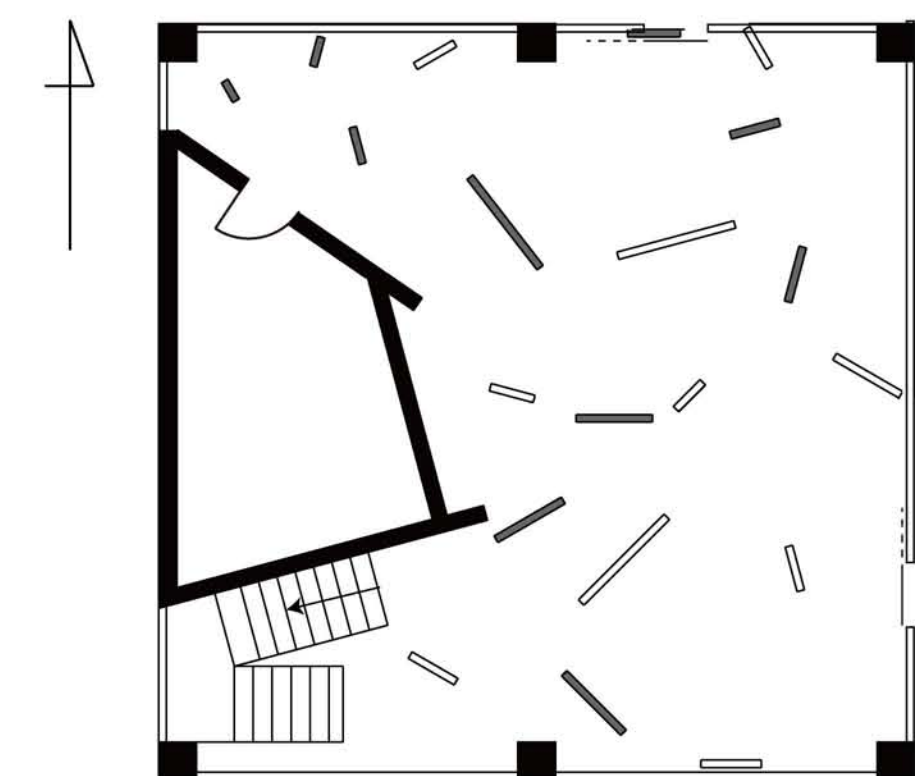
箱に押し込める

床、壁、天井にペタペタと素材を貼る。
それは重なり合い、散らばり合い、混ざり合い、ぶつかり合う。
飛び回っているような躍動感が生まれる。

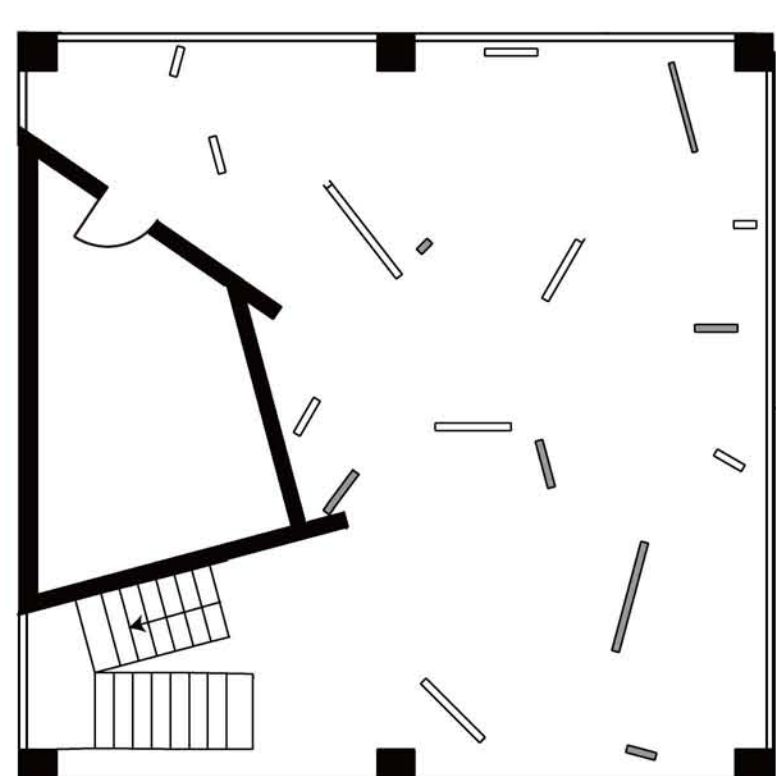
さらに上下から伸びてくる板

そこは、上下左右がなくなったような空間。

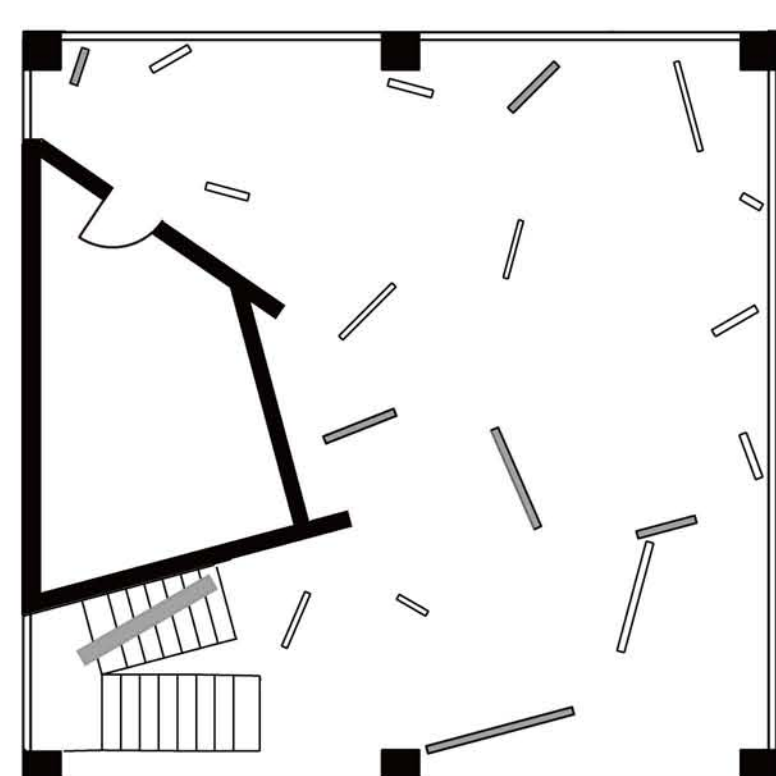
自分の周りが全て動いて変化しているような、躍動感の空間



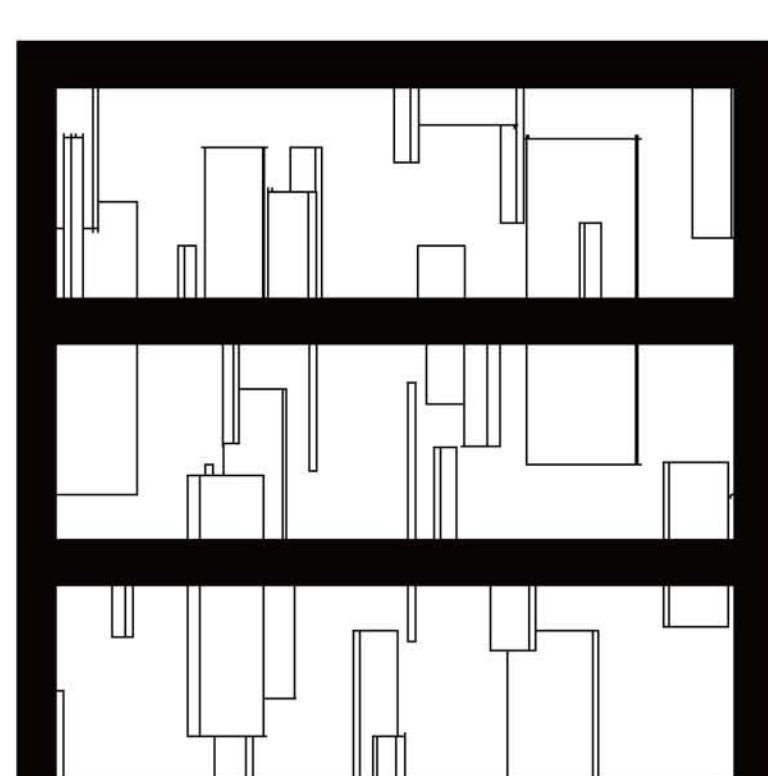
1 階平面図 S=1:100



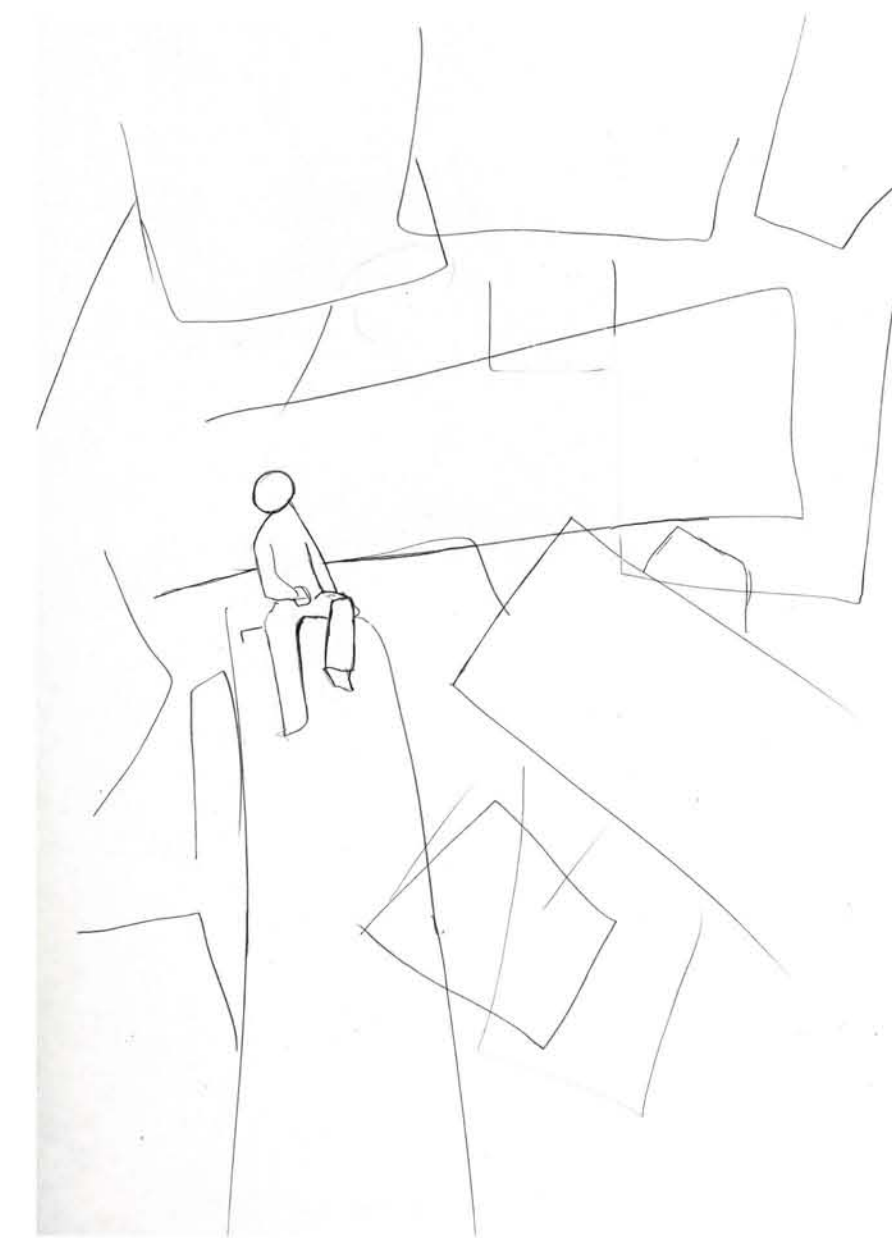
2 階平面図 S=1:100

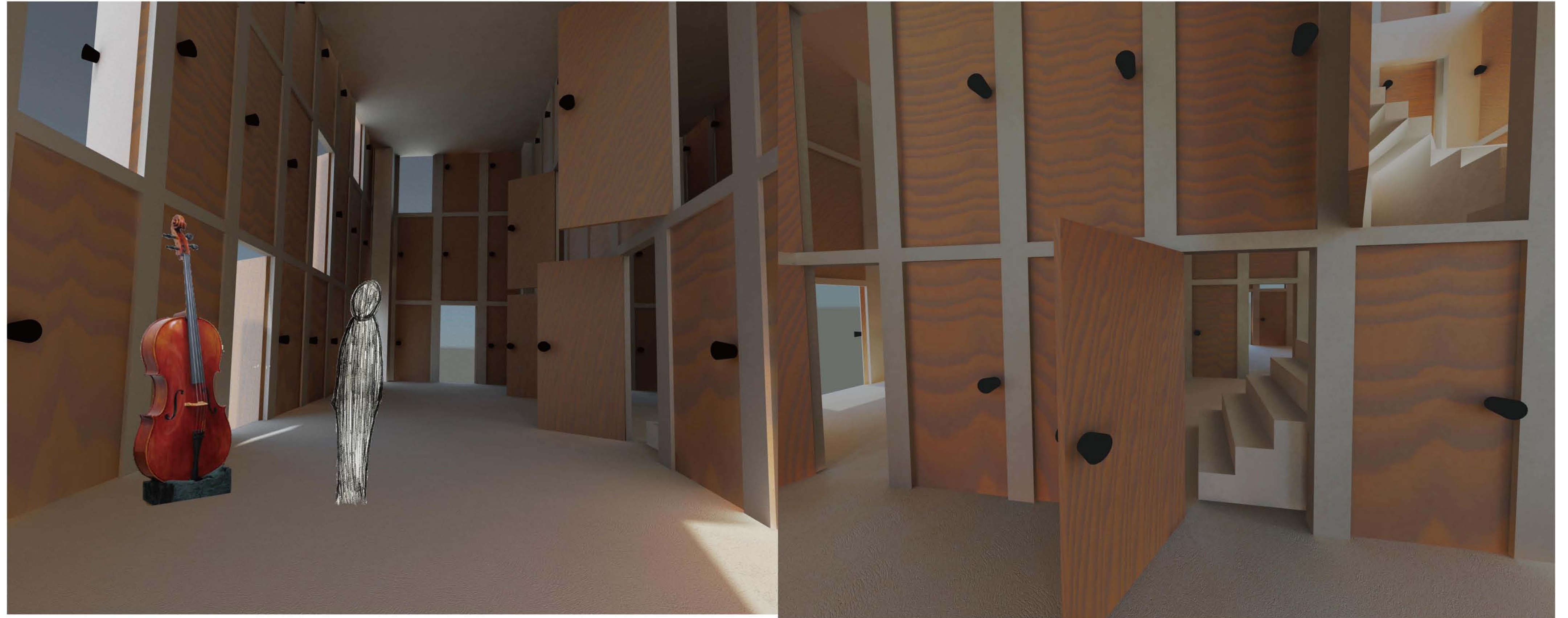


3 階平面図 S=1:100



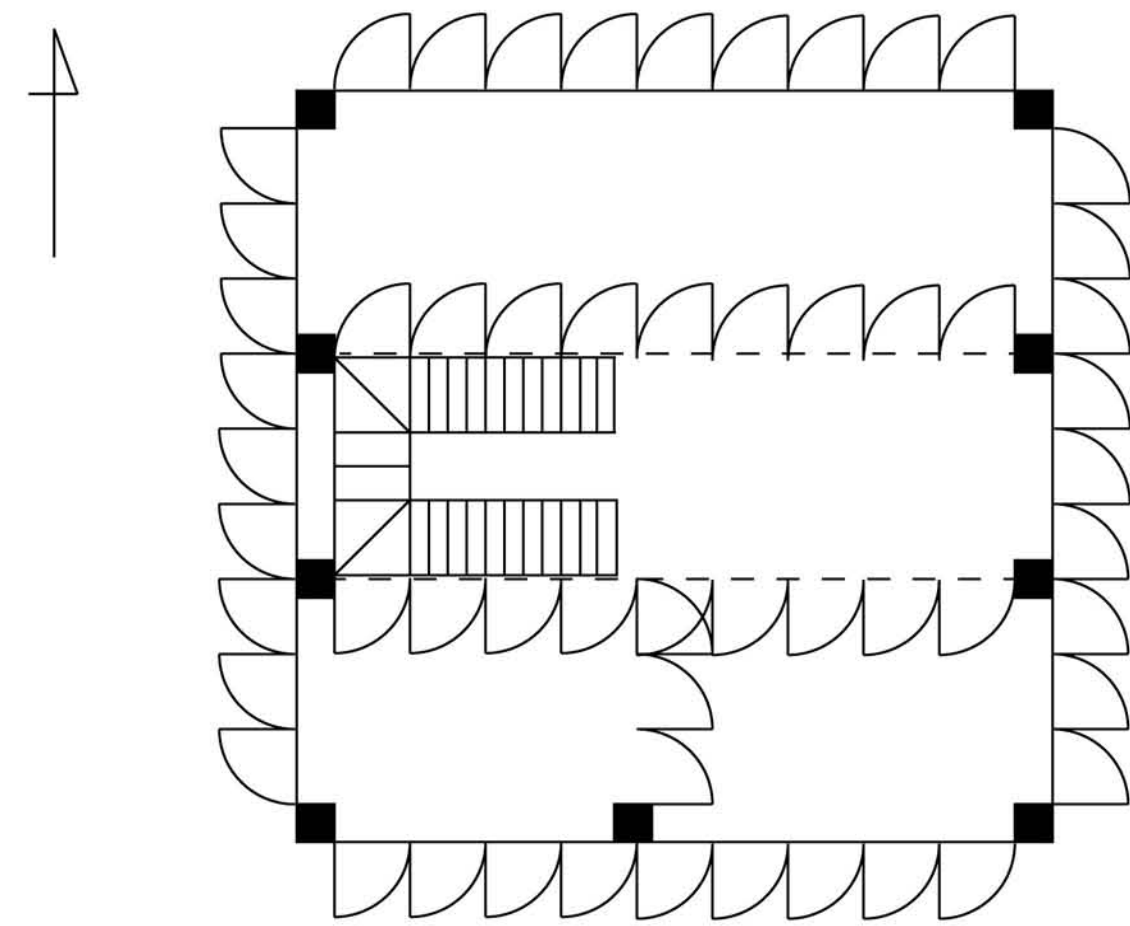
断面図 S=1:100 躍動する地図.jpg



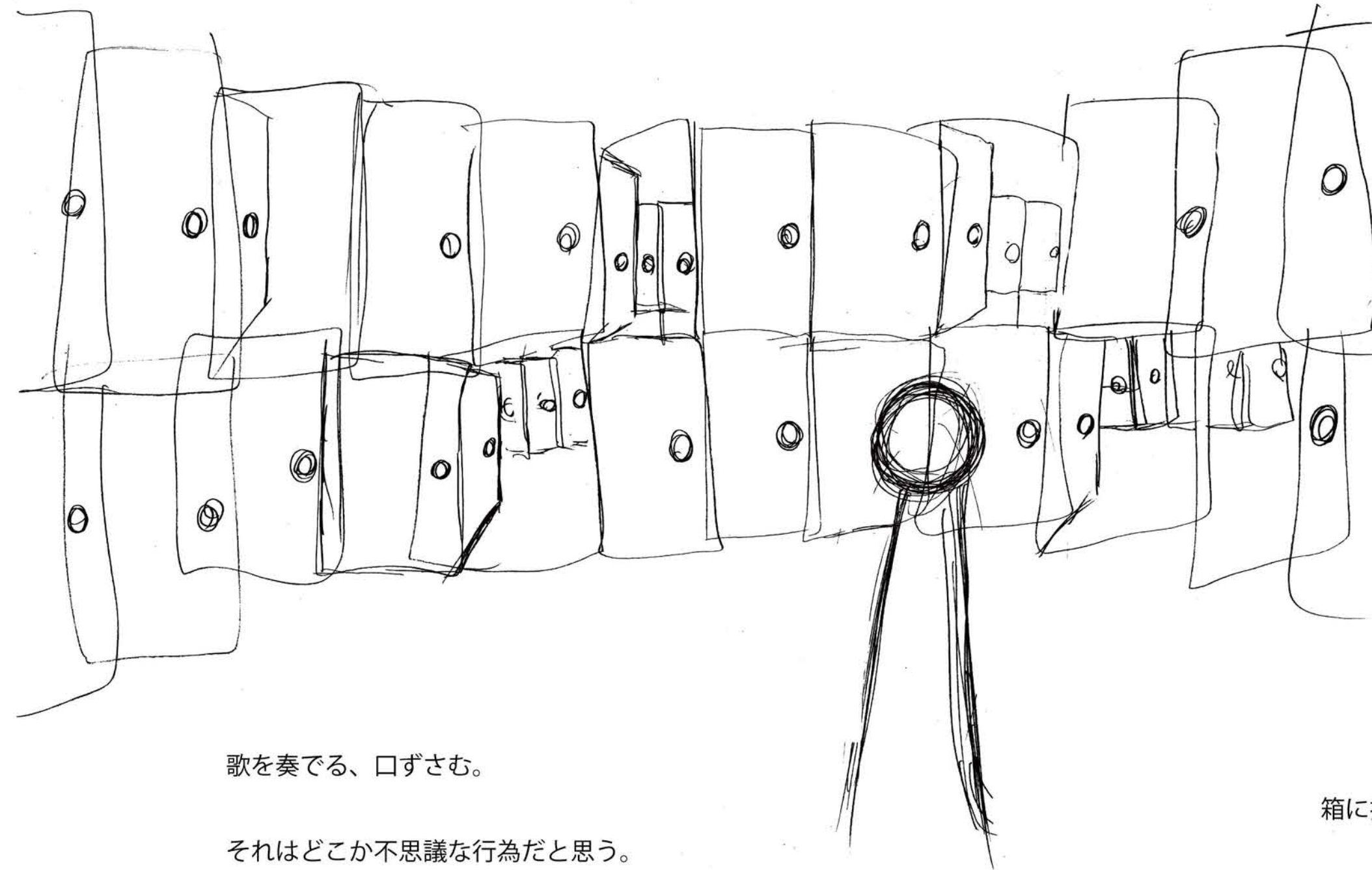


踊る空間

楽器



1 階、2 階平面図 S=1:100



歌を奏でる、口ずさむ。

それはどこか不思議な行為だと思う。

生命活動に、それはなくても問題ないけれど、

誰しもが当然のごとく行う。

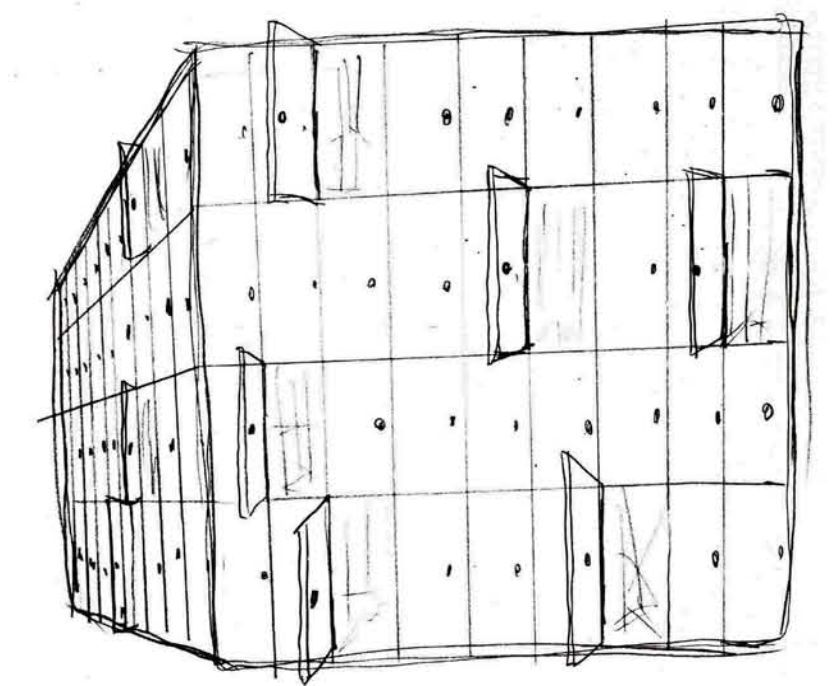
はるか昔から、どの国の、どの人間も。

誰しも聞き、奏で、口ずさむ。

奇妙で、不思議で、どこか滑稽だ。

人間自身に備わっている不思議なリズム感。

そんな気がする。



箱に押し込む——

ドアが均一に、一面に並んだ空間。

日常ではあり得ないその光景は、奇妙なリズム感を生みだす。

そしてそのリズムの中で、ドアは閉じたり開いたり。

まるで、リズムの中でドアが踊っているような、

どこか楽しい感覚。

踊っているリズム、

楽しく唄い、奏でる、そのリズムが聞こえてくるかのようだ。



隆起する塔

料理

食べるという行為、それは人間の最も根源的な行為であると思う。

動物としての姿を隠し、別な高次な存在として振る舞おうとする人間の中に潜む、生命の力強さ。

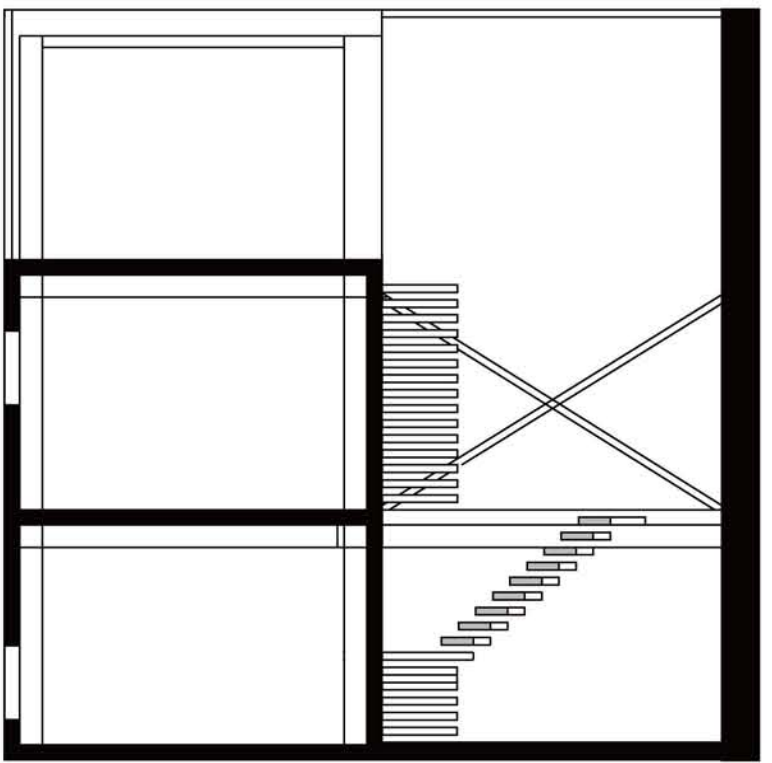
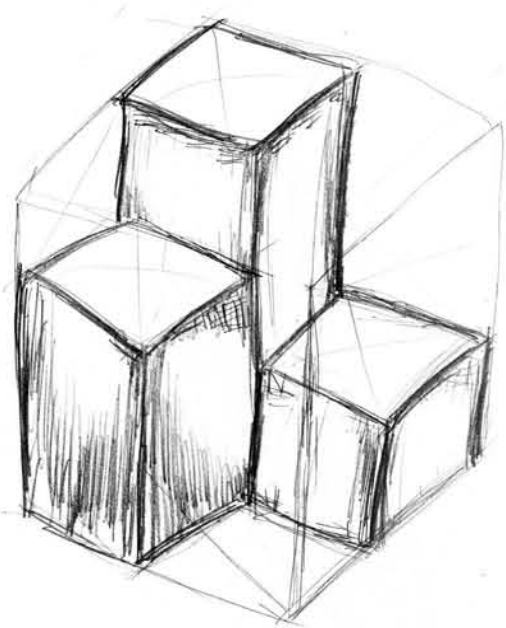
生物のエネルギーを感じさせる行為。

大地を歩む、山肌を登る、海を漕ぐ。

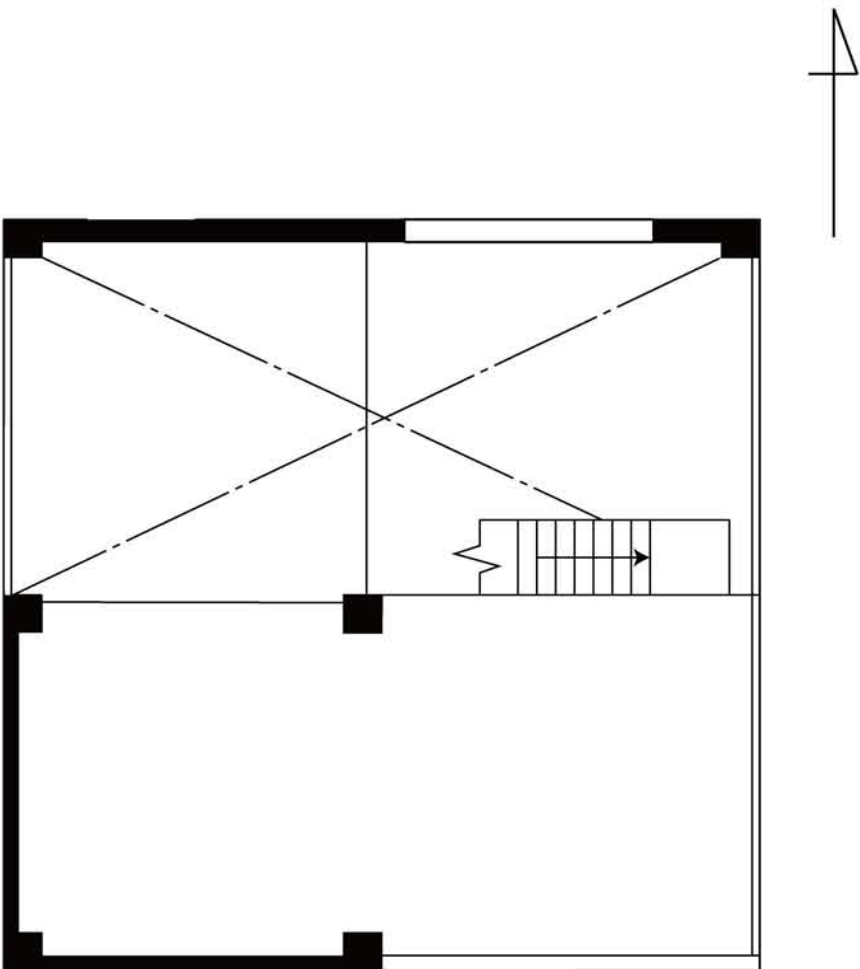
それらに似た、強さ。

文明を生きる私たちが忘れかけている、自然の中を生きる強さ。

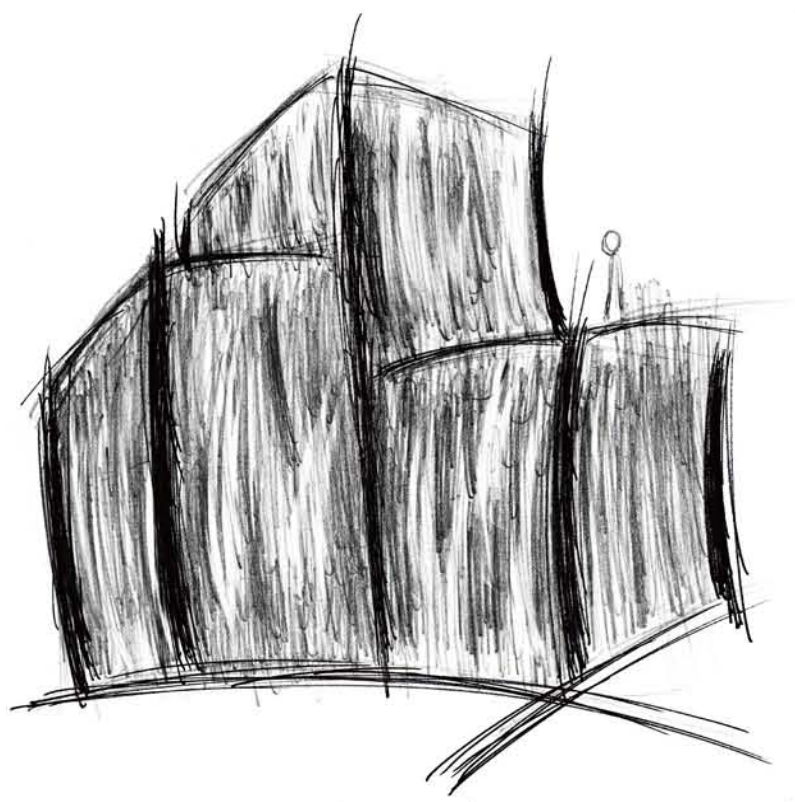
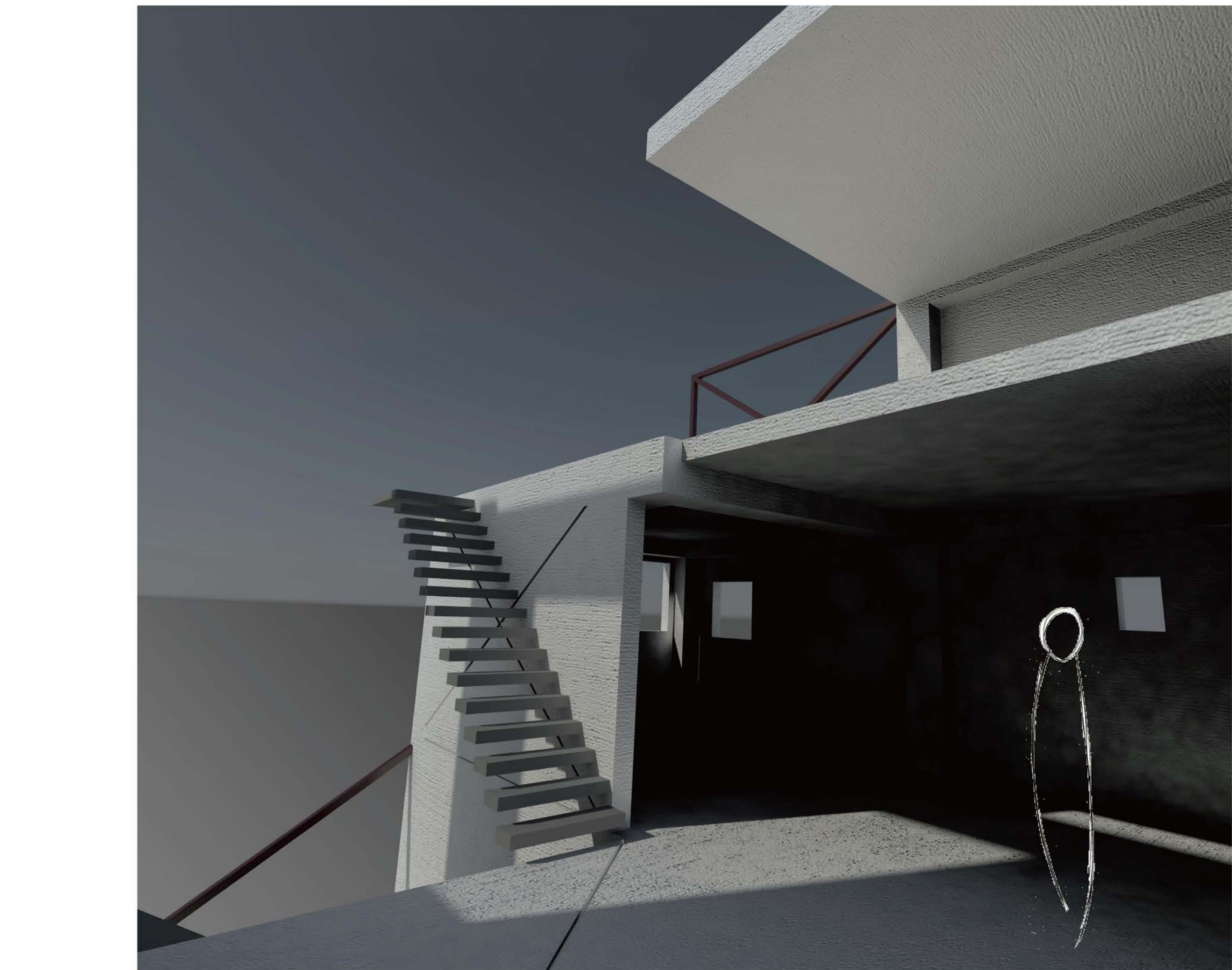
料理が私たちにそれを教えてくれる、気付かせてくれる。



断面図 S=1:100



3 階平面図 S=1:100



箱に押し込める——

地面から建つような、ゴツゴツとした力強さ。

隆起してきた力強さ。

そこを私たちは登る。

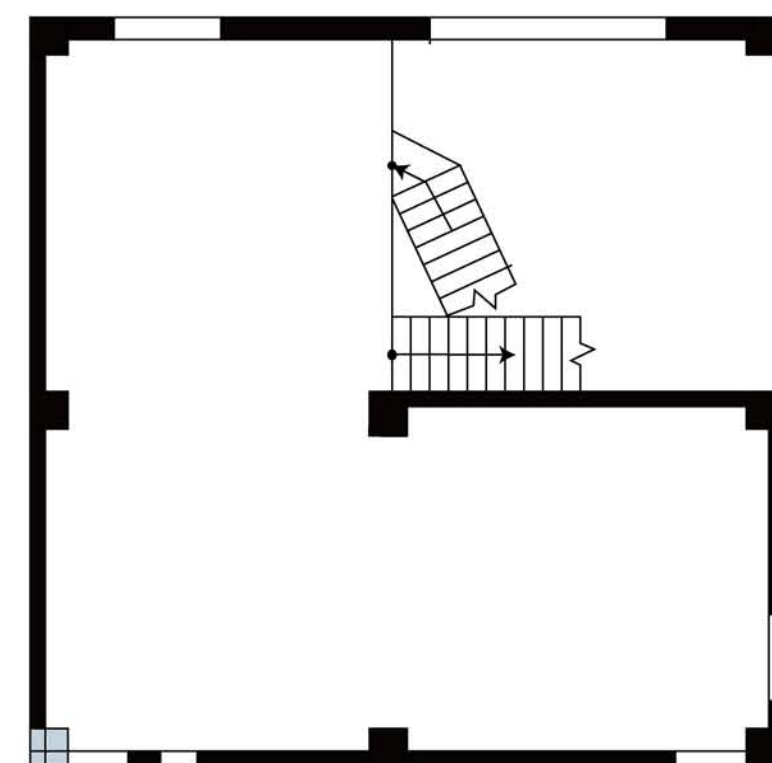
山肌を蹴るように、

壁にそって少しずつ登っていく。

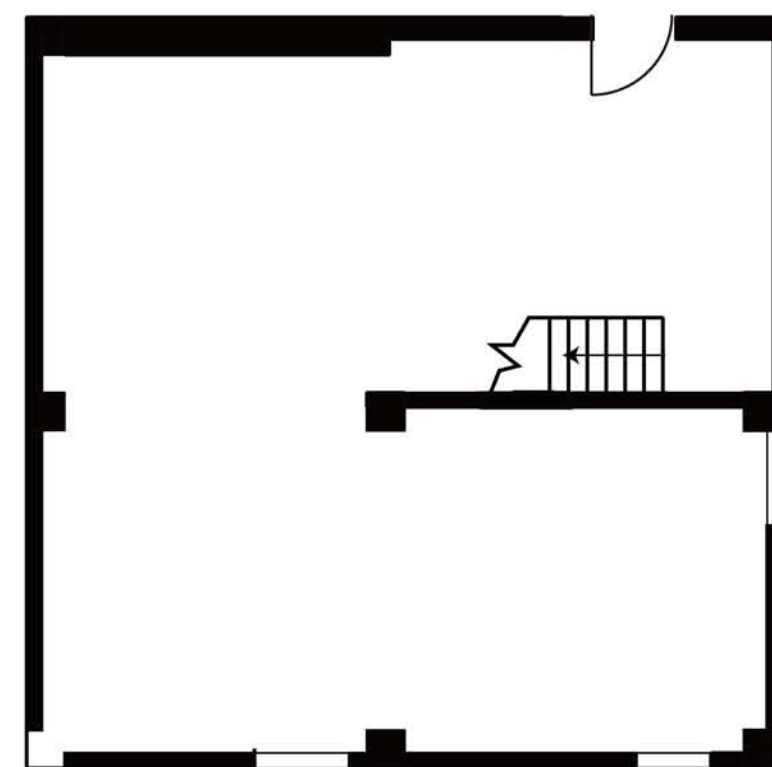
そして頂上に近づいていく。

この建築は生命力に溢れている。

私たちは蹴って登っていく。



2 階平面図 S=1:100



1 階平面図 S=1:100